

さて芭蕉と曾良は

本文>南部道遙かにみやりて、岩手の里に泊まる。

この岩手の里とは現在の岩出山町。「南部道遙かにみやりて」というが金成までは南部道に戻っている。現在の4号線と重なる。

「南部道遙かにみやりて」にまどわされたか

私は457号線を西に。栗駒町経由で岩手山町へ。

一の関から457号で宮城県境を超えて道は南へ、一時間ほど走ってくりはら田園鉄道の栗駒駅に出た。

13時を廻っていただろうか、駅前の蕎麦屋へ、とろろ蕎麦が2種類、とろろと自然薯。

ぶなの原生林の中に開けた町というのが売り物だから、自然薯だけでもと思うが、それこそ自然薯。いつも手に入るとは限らないか。

芭蕉にとろろの句がある。

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁 芭蕉

(まりこにはおくの細道の帰りに寄った)

私にもとろろの句があった。

むずがゆし母の十八番のとろろ汁 心太

芭蕉と曾良が金成を出てから、岩出山町までのルートが日記には記されていない。

そのまま古川に向かって築館町から内陸に入ったか。

私はというと、もうはっきりしなくなっている。

栗駒から道は2手に分かれる。国道457号線と県道。

たしか県道で。県道xxx号線にはこの道でいいですかと、

ちょうど店先に出ていた床屋さんに尋ねた記憶がある。

「県道xxx線といわれてもねー」

私は地図を見せた。

「あーこのままいけばその道にはいるね」

そうだ私はもう一冊地図を持っていた。東日本の地図だったか。

マップリングの全日本には県道の線名はのっていない。

あの地図はどこに?どこかでなくしたような。

陸羽東線の岩出山駅は平野の中にぽつりと置かれたような駅。

この陸羽東線、愛称がおくの細道湯煙ラインとか。

この町について日記の記述が何故か多い。曾良は天候と行程、

宿泊地程度で余計な観察はすくない。では日記での岩出山の描写はというと

>岩出山(伊達将監)、やしきも町も平地。

>上の山は正宗の初の居城なり。杉茂り、東の方、大川也。

ここでいう「やしき」は伊達将監の屋敷ということだろうが、山間をぬけたら

思いがけずもの平野を素直に描写している。

その日の天候についても饒舌だ。これは変わりやすい天候だったことによるだろうが

日記>14日 天気吉。…真坂にて雷雨す。乃晴、頓て又曇りて折々小雨する也。

そしてこの岩手山の記述にはほかと一風かわったものがある。

地名の羅列。これから辿る地名が並んでいる。

日記>>中新田町 小野田(仙台より最上の道に出合) 原の町 門沢(関所有) 湊沢 軽井沢 上の
畑 野辺沢 尾羽沢 大石田船乗

日記の中で今後の予定が書き込まれているのはここだけである。

岩出山で芭蕉と曾良、これからのコースの確認をしたものか。

私も岩出山の駅前で、「やしきも町も平地」というのを実感した。

47号線を北北西に。栗駒から分かれた457号線との合流点を過ぎてすぐだったか、
鳴子温泉宿泊案内所が。農家の庭にプレハブの事務所。

作業着に長靴の男性が、「国民宿舎だなー、安い方がいいだろう」と私に。

バイクで旅行してる奴に金なんぞ持ってるわけないと見たな。たしかにそうだが。

「国民宿舎って県とか町とかやってる？」

「いや民間だ 瀧島ホテルといえはわかるから」

その人ホテルに電話するわけでもなく、予約票とかチケットとか書かせるわけでもなく
要するにどこでも空いてるといことか。5月17日(月)は。

まーホテルも取れそうだしだと47号線をのんびりと、いや一車の走ってない国道って
いいものだなと。あやうく小黒崎観光センターを通りこそうとする。

そうだ寄らなければいけないところがあった。

本文>>南部道遙かにみやりて、岩出の里に泊まる。小黒崎・みずの小島を過て、なるこの 湯より

歌枕で聞こえた小黒崎・みずの小島。小黒崎・みずの小島の歌枕といえは、こんな歌からだ。

小ぐる崎みずの小島の人ならば都のつとにいざといわましを

この歌の意味ははっきりしないが、みずを 見ずにかけてまだ都をみたことがないなら
聞いてください。何でも都のことをお話しましょう という意味か
小黒崎・みずの小島が歌枕で聞こえたと言いたが、岩出山も。

思えども岩手の山に年を経て朽やはてなん苔のむもれ木
みちのくのいわでの森のいわでのみ思ひをつくる人もあらなむ

小黒崎は観光センターの駐車場から国道47号、陸羽東線ごしにながめるのだが
どこにでもあるような小山。

みずの小島は鳴子の方の方に少しいってから、砂利道を江合(荒尾)川にむかうのだが、
ぼつりと(みずの小島)という標識が路傍にあるだけ。

遠くに川筋らしきものはみえるのだが、眼前には田が広がっているだけ、
かつては川原がこのあたりまで広がり、川の中洲が小島のように散在していたのか
もしれない。

日記>今は川原、向付たる也。古へは川中也。

宮・一つ栗の間、古くは入江して、玉造江成と云。今は田畑なり
私が目にした景色も、曾良が描写する景色も、そう変わってはいない。
よく「歌枕になるほどの名勝の地」などという言い回しをきくが
そういう土地もあるかもしれないが、それ以上に
思いを引き出すための手がかりになった地名があったということなのだ。

その国民宿舎は誰に聞かずともわかった。

鳴子温泉というアーチをくぐってだらだらした坂の途中に

国民宿舎瀧島ホテルはあった。道に面して玄関。

歩道もない一車線の細い道。バイクをどこにおいていいやら

フロントの女性、「いたづらされるといけないので前にいれましょう」と

向いのしもた屋の土間にバイクはおさまる。
1999年5月17日、その日は私の51歳の誕生日。
人間五十年下天にくらぶれば
たしかに夢幻、なんとなしに生きてしまった。
私には妻もない。子もない。人に誇れるようなものは何もない。
湯は熱かった。源泉に近いせいだろうか。
湯冷ましにホテルの下駄を借りて温泉街を歩く。
人間五十年下天に響け下駄の音 心太

17 尿前の関

5月18日 私は朝湯を浴びて尿前の関跡へ。
芭蕉と曾良は岩出山から出立。小雨のなかを5里ほど途中道を変えて尿前の関へ。
私のバイクのメータでは岩出山駅から、尿前の関跡まで24 Km
さて尿前の関、用意周到な曾良にしては手抜かりがあったようだ。

尿前の関跡は窪地に舞台のセットのような石畳と門扉が復元されていた。
この関所、出羽との境界に仙台藩が設けたもの。東北の外様の雄、仙台藩に対して
幕府の目も厳しかったであろうし、それに対して仙台藩もナーバスになっていただ
ろう。

本文>なるこの湯より尿前の関にかかりて、出羽の国に越えんとす。此道旅人稀な
る所なれば、関守にあやしめられて、漸(やうやう)として関を越す。
日記>関所有。断六ヶ敷也。出手形ノ用意可有之也

いやーこんなところをみると、曾良の簡潔さの方がここちよいが
関所あり。断り難しき也。出(で)手形の用意、これ有るべき也。
仙台藩から出羽へ抜けるにあたっては、出手形を用意しなければならなかったとい
うことなのだ。その情報が曾良には入っていなかったようだ。
もし入っていれば、岩出山の庄屋なり、村役なりに渡りをつけていた。
断六ヶ敷 おそらく曾良一人で答弁したのであろう。いかなる断りをしたのか
知る資料はないがおくの細道・勸進帳とでもいうべきシーンがあったかもしれない。

当時の尿前の関は間口40間、奥行44間、面積1700坪、
切石垣に土塀をめぐらして、10棟もの建物があつたという。
その関の周囲に尿前の宿(しゅく)が形成されていたというから、
相当量の通行量があつたと思える。
芭蕉のいう「此道旅人稀なる所なれば」にはあたるまい。
それから出羽街道一の難所、中山道。険しい谷越えが続く道。
現在中山道は歴史の道として整備されていて9kmほど続く。
バイクでいけるわけもなく、47号線を走る。
山形県最上町にでる。尿前の関から11km。
そこに封人の家がある。芭蕉らが宿を求めたところである。
封人の家とは辺境を守る家、出羽側の守りであった。

中山道を越えた芭蕉と曾良は封人の家を見かけ宿を乞う。
「封人の家とは辺境を守る家、出羽側の守りであった」
と書いてしまったが、はたしてどうであったか。
封人の家と称されている家は現存し、公開されている
たしかに大きな家ではあるが、各地に残る豪農の屋敷と比べて大きいとも
思えないし、といっても笹が見た豪農の屋敷も2,3見ただけで、どこで
見たものやら思いだせないのだが、それに比べて大きくもない。
なによりも疑問は、伊達藩の尿前の関がその規模から砦とも山城とも取れる

というのに、一朝事あるときの守り、あるいは攻めとしての装備が一切ない。

封人の家の解説板によれば

「封人の家」とは辺境を守る家のことで、代々庄屋を世襲してきた有路家である。だが封人なる名称が出羽藩にあったのかどうかよくわからない。もし出羽藩になかったとするならば封人という言葉、芭蕉はどこからもってきたのか。まだ奇妙なことがある。

陰暦5月15日。陽暦の7月1日。尿前の関以降。

本文＞大山をのぼって日既暮ければ、封人の家を見かけて舎(やどり)を求む。

日記＞壱り半中山。

○堺田(村山郡小田島庄小国之内)出羽新城領也中山より入り口五、六丁先に堺机有。

たしかに有路家は堺田の庄屋であるから二つの記述に相違はなさそうに見えるがその日どこに泊まったか日記に書かれていない。筆まめで几帳面な曾良にしては極めて異例である

日記の奇妙さを解明する手段はもたないから、先に進むとして、

○16日 堺田に滞留。大雨、宿(和泉庄や、新右衛門兄也)

○17日 快晴、堺田を立。

本文＞三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿する枕もと

一日の足止めが3日になった。さて現存の封人の家、一つの屋根の下に座敷それを取り囲むような大きな土間、そして土間のはずれに馬小屋という作り。当時のこの地方の標準的な作りだという。

伊賀育ちの芭蕉にとって一ツ家に馬も寝たりという状況は興味深かったであろう。

夜のしじまには遠くの物音も近くに聞こえよう。

だが芭蕉は空間的誇張の表現としてとられるのでは

ものたりなかったのだろう。そう馬小屋に寝かされたと取られたかったんだ。

そう考えると封人の家の意味が見えてくる。

庄屋の家では、馬小屋みたいなところに寝かされることはないだろう。漢の時代を思わせる封人なら、なるほど国境の守りの家、客人など泊める余裕もあるまい。

要するにこの句との整合性を計るための詞書ではなかったか

47号線を挟んだ向い側が駐車場と土産もの売り場になっていた。

店頭で鮎の串焼きを売っていた。香ばしい匂いに思わず買う。

香ばしさとほろ苦さが口に広がる。

私の家の前の「酒匂川」は6月1日から鮎の解禁。

(1999年、当時私は小田原市栢山に住んでいた)

土産物屋の男性に

「尾花沢にいきたいんですが、山刀伐峠通れますか」と聞く。

「何で行く」

私はバイクを指差す

「あ一通れるだろう、軽4のトラックが入れるから」

堺田、笹森、赤倉と47号線、それから左に折れて一剋、

その辺の地名は曾良の記述と変わらない。トンネルの手前に

おくの細道山刀伐峠の標識。たしかに山道だが、七曲がりや急な坂も無くなだらかに

上っていく。

ただ軽4輪が一台通れる程度。対向車がきたらと不安だったがすれ違う車もなかった。途中木の枝がアーケードのように、道の上にかぶさったりもする。

本文> 高山森々として一鳥声きかず、木の下闇茂りあひて夜行くごとし。

芭蕉が描写した風景が垣間みえたが、この地形からしてそう難所であったとは思えない。また芭蕉の誇張癖がでたかと今は考える。

木の下闇バイクの音もくぐもりて 心太

峠道から少し外れてこの峠の最高点。バイクをおりて数分登ったか。ここまで封人の家から13km程度である。

おくの細道の文学碑がある。

加藤楸邨の揮毫。おくの細道から以下抜粋。

高山森々として一鳥声聞かず、木の下茂りあひて、夜る行くがごとし。
雲端につちふる心地して、篠の中踏分踏分、水をわたり岩に躓いて、
肌につめたき汗を流して最上の庄に出ず。

加藤楸邨という俳人について、私は詳しく知らない。
ただ彼が芭蕉の句の中で一句選ぶとしたら

蛸壺やはかなき夢を夏の月

明石夜泊と詞書されたこの句を挙げている。

楸邨のこの句への思いは私が明石に移ってから知った。

ところが芭蕉は須磨までは足を運んだがどうも明石にはこなかったらしい。

これもつい最近知った。

さてこの心細い山道を反脇差をさした屈竟の若者に案内されて越えたわけだが、封人との対で屈竟(屈強)の若者を出したのだろう。

日記では近道をしたいために案内させたとある、

雨で一日の足止めをとりもどすためか。それとも約束の日取りがあったか。

藪影にまっしろいきのこを見つけた。

虚ゆえの実か真白ききのこ 心太

18 尾花沢

峠を下れば平坦な道。「市野々」と名前も伸びやか。

11:30ごろ尾羽沢の芭蕉・清風歴史資料館へ。

何故案内人まで頼んで山刀伐峠を越えたかといえば、

おそらくこの地の鈴木清風に日程を知らせてあったのではないかと思える。

松島からの強行を考えると、すでに遅れていたか。

芭蕉と曾良はこの地で10泊する。黒羽14泊に次ぐ長期滞在である。

もっとも黒羽は雨に祟られたということもあるらしいが。

尾花沢に到着したその日は清風宅に、それからは清風が手配していた養生寺の離れに。

資料館は旧清風宅の隣に造り酒屋の店構えを移したものという。

本文> 尾花沢にて清風と云者を尋ぬ。かれは富るものなれど志いやしからず。

さて清風とはいかなる人物であったか

清風とは、この地の特産品である「紅花」の仲買人。

紅花を買い付け、上方や江戸で売り捌いた。
彼にこんな逸話が残っている。

江戸の商人が紅花を買い叩こうと、不買のポーズ。
お安くしますからそうおっしゃらず
なんて清風はいわない。売れずに持ち帰ったとあったら、国に顔向けできぬ。
品川沖で紅花燃やしますからご覧下されと火をつけた。
「待て待て早まるまいぞ清風さん」
「そうそう、わたっしゃ江島さまからたのまれておった」
弾がなきゃ欲もかけぬ、江戸のごうつく。
「後生だからお宝燃やすなんてやめておくれ、いいよいよ残り全部
ぬしの言い値で買わせてもらう」
してやったり清風。それならばと高値で売りぬく。
品川沖でもやしたのは、紅花を包んでいた籾殻、筵の類。
資料館の説明文を私の記憶の中で脚色されているかもしれぬ。
そのあとのがまたおもしろい。
清風高値で売りぬいたその金持って吉原へ。三日三晩いりびたり。
よくある話だ。悪銭身につかずの類か。
ところがそうじゃない。
三日三晩吉原中を買いきり、吉原の大門を閉めさせたそうな。
でドンちゃんさわぎ。いや女達を休ませたというのだ。
こうなると吉原にいかなかったかもしれない。
さてどのくらいの金になるのだ。店の数、女の子数もはっきりしないが
ちょっと現代風にでかんがえてみよう。
女の子の一日の売上が平均10万円、店に10人女の子がいるとして1軒100万
円吉原に100軒あるとして1日1億。三日で三億円。
ざっと3億の金。吉原の元締め前に積んだということになる。
実際にそんなことがあったか。
「吉原に就いての話 …田村鷲魚」を読んでも触れられていない。
そういえば資料館の説明文に「江戸の資料では確認されていない」とあったか。

まゆはきを俤にして紅粉(べに)の花 芭蕉

俤は眉唾なり紅粉(べに)の花 清風を詠める心太
ともあれ江戸の商人に一歩もひかなかったことに、尾花沢の人々は
拍手をおくったんだろう。

清風は芭蕉等を
「長途のいたはり、さまざまにもてなし侍る。」

養生寺の離れに案内したと書いたが、清風宅と養生寺、交互に泊まったらしい。
紅花の収穫期で多忙だった清風に代わって素英が専ら芭蕉等の接待。

涼しさを我宿にしてねまる也 芭蕉

どちらで詠まれたかわからないが、すっかりくつろいだ芭蕉の姿がある。
この句を発句として歌仙が巻かれている。

すずしさを我やどにしてねまる也 芭蕉
つねのかやりに草の葉を焼(たく) 清風
鹿子立をのへのし水田にかけて 曾良
ゆうづき丸し二の丸の跡 素英

檜紅葉人かげみえぬ笙の音 風
鴟のつれくるいろいろの鳥 風流
ふりにける石にむすびしめ縄 英
山はこがれて草に血をぬる 蕉
わずかなる世をや継母に偽られ 流
秋田酒田の波まくらうき 良
うまとむる関の小家もあわれ也 蕉
桑くふむしの雷に恐づ 風
なつ瘦に美人の形おとろひて 良
霊まつる日は誓はづかし 英
入月や申酉のかたおくもなく 風
雁をはなちてやぶる草の戸 蕉
ほし鮎の尽きては寒く花ちりて 英
去年のはたけに牛蒡芽を出す 良
蛙寝てこてふに夢をかりぬらん 蕉
ほぐしるべに国の名を聞く 風
あふぎにはやさしき連歌一両句 良
ぬしうたれては香を残す松 英
はるる日は石の井なでる天おとめ 風
えんなる窓に法華よむ声 蕉
勅に来て六位なみだにたたづみし 英
わかれをせむるたいまつのかず 良
一さしは射向けの袖をひるがへす 蕉
かわきつかれてみたらしの水 風
夕月夜宿とり貝も吹よはり 良
とくにさかる男や蓑わすれけん 英
たまさかに五穀のまじる秋の露 風
かがりにあける金山(かなやま)の神 蕉
行人の子をなす石に沓ぬれて 英
ものかきながす川上の家 良
追ふもうし花すふ虫の春ばかり 風
夜のあらしに巢をふせぐ鳥 英

執筆は素英か

上の歌仙から清風が詠んだものを拾ってみると

つねのかやりに草の葉を焼(たく) 清風
檜紅葉人かげみえぬ笙の音 風
桑くふむしの雷に恐づ 風
入月や申酉のかたおくもなく 風
ほぐしるべに国の名を聞く 風
はるる日は石の井なでる天おとめ 風
かわきつかれてみたらしの水 風
たまさかに五穀のまじる秋の露 風
追ふもうし花すふ虫の春ばかり 風

9句詠んでいるが なんと

虫3句 蚊、桑くうむし(蚕)、花すう虫(蝶か蜂か)
草木5句 草の葉、檜紅葉、桑、五穀、花

うーん。清風の句、紅花の仲買人の生活がそのままてきたか

この句から見る限り 清風は朴訥鈍重。
あの逸話とはかけ離れている。
ただ一旦こうと決めたら挺でも動かぬかもしれない。

この歌仙、全体に不出来。俳諧の名手、芭蕉をしても
初めて手合わせの二人を交えれば、こんなものかもしれない。

例えば

わずかなる世をや継母に偽られ 流
秋田酒田の波まくらうき 良
うまとむる関の小家もあわれ也 蕉
桑くふむしの雷に恐づ 風
なつ瘦に美人の形おとろひて 良
霊まつる日は誓はづかし 英

句の後を見よ

偽られ-まくらうき(憂き)-あわれ也-恐づ-おとろひて-はづかし
どうも湿って感情からぬけださない。

雁をはなちてやぶる草の戸 蕉
ほし鮎の尽きては寒く花ちりて 英
去年のはたけに牛蒡芽を出す 良
蛙寝てこてふに夢をかりぬらん 蕉

ここも句の後をみると

草-花-芽-夢

うーん芭蕉は歯がゆかっただろうな。

この歌仙、芭蕉、曾良は詠み捨てのつもりだったのかもしれない。
曾良の書留にも残されていない。まー素英が執筆だということもあろうが
歌仙を巻いたとも書いていない。
では何故この歌仙が知られるようになったかというところ。
須賀川の相良等窮宅に保管されていた、
等窮は芭蕉の弟子ではなく、むしろ奥羽においては芭蕉より知られていた。
素英らとの交流もあったであろう。

もう一卷尾花沢で巻かれているのだがこれも曾良の記録にはない。
日記で5月24日、25日の人の集まりからみて、歌仙が巻かれたことは
まちがいなさそうだが、25日に連衆故障有て俳なしとある。

19 立石寺

5月18日 鳴子から立石寺へ
道を走ればほのかに甘い果実の匂い。
途中天童駅によってみる。
閑静な駅だ。1999年5月まだ新幹線の工事は始まっていなかった。
駅前の角型の郵便ポストの上に将棋の駒、王将が。
なるほど将棋の駒の産地である。

尾花沢に滞留していた芭蕉、人々に勧められて立石寺(山寺)に赴く。
途中前出の

まゆはきを俤にして紅粉(べに)の花 芭蕉

を詠んだとされる。

紅花ではもう一句、各務支考が採録した西華集に

行末は誰(たが)肌ふれむ紅の花 芭蕉

この句いかなる時に詠まれたかわからないが翁の句として伝わっていると支考はいう。

ちょっとつやっぱいが、小唄風で芭蕉の句ではなさそうだ。

(あとから調べたが岩波の芭蕉俳句集には収録されていない)

この句の碑が天童市の城山公園内にあるそうだが、私はいかなかった。

寺の駐車場にバイクをおいたら、すぐそのあとにバイクの警官。

じろりと私をみる。何かかと思つたら

「そのバイクできたのかい つかれただろう」と

バイクのナンバープレートで小田原を確認し、

ここまでの距離をわりだしたのだろう。

それだけ行って、戻ろうとする。

「あの宿坊ってすぐに泊まれるんですか」

「今どうか 〓〓 坊ならとまれるかもしれないな」と

芭蕉に倣って預かり坊に宿とって参拝しようかと思つたが

宿を探す時間が惜しくて、バイクにリュックをかけたまま

参道へ。午後3時だった。

階段を上がると根本中堂。いきなり根本といわれてもありがたみはないが

ほていばらの仏?肩に童子を乗せて笑っている。これもあまりありがたみがない。

根本中堂の左に芭蕉句碑

閑さや巖にしみ入る蟬の声

さてこの句 書留では

山寺や石にしみつく蟬の声

それが

さびしさや岩にしみつく蟬の声

になり、おくの細道で知られる「閑さや」の句となった。

この句だけの推敲というよりも、立石寺の本文

>岸をめぐり、岩を這て、仏閣を拝し、佳景寂まくとして心すみ行くのみおぼゆ

に導き出されてこの形になったようだ。

芭蕉の句作りを考えるヒントになろう。

山門から長い階段がくねって奥の院へ。踊場ごとに息がきれたか老婆が座り込んで

いる。まるで地藏か羅漢のように。

階にしゃがの花咲く極楽や 心太

この冬はどこに居やった蜩蝶 心太

奥の院まで上る。よくぞこんな岩山に堂を作ったものと驚く

戻って芭蕉と曾良の像 そこを少し戻ると大銀杏の下に茶店

そこに高浜虚子、年尾親子の句碑

いて心の根床机斜めに茶屋涼し 虚子

我もまた銀杏の下に涼しくて 年尾

年尾の句は凡庸。親をこえることのできなかつた息子の句らしい。
年尾は芭蕉と万菊丸(杜国)のこんなやり取りを意識したのかもしれない。

よし野にて桜見せふぞ檜の木笠 芭蕉
よし野にて我も見せふぞ檜の木笠 万菊丸

親と子が涼んでいたや大銀杏 心太

閑さや巖にしみ入る蝉の声 芭蕉
この句、立石寺の印象であるとともに、
芭蕉が若かりしころ仕えた藤堂義忠公(蝉吟)への追慕の念も含まれているかもし
れない。

さて警官から聞いたxxx坊、間口で声をかけたら、
「何人様ですか」とおばさんがでてきて聞く
「一人ですが」と答えたら、黙って奥に引っ込んで。もどつてくると
「あの今日は休みにしてるもので」と間の悪そうに。
予約もなしの一人では泊めないということだろう。
天童の駅前にビジネスホテルがあった。あたってみよう。
17:00天童駅から電話。夕食もあるという。
あたりを見ましても食堂が一軒あるだけのロータリー。
食事をお願いします。でも本当に何も無い駅だ。ここに新幹線の駅ができるのだろう
か

ポストには王将金銀の守りなし 心太

20 大石田

夜半からの雨が朝は本降りに。
大石田をめざす。途中村山の道の駅で休む。客の姿もなく侘しく寒い。
大石田の町に入る手前、土手に杭が
「芭蕉翁最上川との出会いの地」
土手に上がってみると濁流とうとう。
五月雨を集めて早し最上川 芭蕉
その風景が眼前に広がる。

芭蕉らは5月28日(陽暦7月13日)馬で天童まで、それから徒歩と思われるが
午後7時ごろ大石田についたらしい。天童から大石田までおおよそ30km、

日記>両日共に危して雨不降...其夜、労に依りて無俳、休す

梅雨の晴れ間、蒸し暑いなかを30kmの道のり、芭蕉、曾良ともつかれきったの
であろう。

私はまず大石田の町はずれの黒滝へ。最上川をわったって黒滝山向川寺の山門に
木立に囲まれ、木の下は雨もまばら
黒滝やほろほろ銀杏の葉が降る 心太

境内で住職とおぼしき人に芭蕉とゆかりのものはと聞いてみたら
「ない」と一言。
5月29日(旧暦)、芭蕉は一栄、川水を誘って(誘われて)黒滝に参拝している
のだがそれには予所労故、止 と曾良は同行していない。
「ない」、どうもあちこちに芭蕉の句碑が多すぎる、それも芭蕉が訪れたこともな

いところや、この句はここで詠まれたわけではなさそうな句が碑になっている。

「ない」多いによろしい

縁(ゆかり)などあるとなかると五月雨て 心太

西光寺に芭蕉真蹟を写した碑がある。

大石田一栄宅でまかれた歌仙の発句、脇が

五月雨を集めて涼し最上川 芭蕉

岸に螢をつなぐ舟杭 一栄

歌仙の発句では集めて涼しだが本文では集めて早しになっている。

一栄宅の歌仙の雰囲気と、本文での流れでは自ずと違うか。

この寺、小寺なのだが立派な仁王門がある

五月雨に赤き仁王と宿りかな 心太

明治の世、子規もこの地を訪れているらしい。

五月雨を集めて早し最上川 芭蕉

ずんずんと夏を流すや最上川 子規

子規は芭蕉を意識すると、どうも力みを感じる。

さてこの大石田で歌仙が巻かれる。

その経緯を本文でみれば

ここに古き俳諧の種こぼれて、忘れぬ花のむかしをしたひ、
芦角一声の心をやはらげ、この道にさぐりあして、新古ふた道にふみまよふとい
へども。

みちしるべする人しなければと、わりなき一巻残しぬ。

このたびの風流、ここに至れり。

ながたらしい言い回しだが、尾花沢での歌仙

芭蕉にとっては不本意だったろうから、なんとかここである程度のものをと

目論んだのだろう。わりなき一巻とはいえ、本文に歌仙の興行を記し、書留に
記されている。

記事番号 12364 へのコメント

大石田、高野平右門帝にて

五月雨を集めて涼し最上川 翁

岸にほたるをつなぐ舟杭 一栄

瓜島いざよふ空に影待て 曾良

里をむかひに桑の細道 川水

うしの子に心慰む夕間暮 一栄

水雲重しふところの吟 翁

侘笠を枕にたてて山嵐 川水

松むすびをく国の境め 曾良

永楽の旧き寺領を載て 翁

夢とあはする大鷹の紙 一栄

たき物の名を暁とかこちたる 曾良

爪紅うつる双六の石 川水

巻揚る簾にちごの這入て 一栄
煩ふ人に告る秋風 翁
水かはる井出の月こそ哀れなれ 川水
礎打とて撰みださる 曾良
花の後花を織する花筵 一栄
ねはんいとなむ山陰の塔 川水
爰た村はうき世の外の春富て 翁
刀狩する甲斐の一乱 曾良
八重葎人も通らぬ関所 川水
もの書度に削る松の風 一栄
星祭る髪は白毛のかかる迄 曾良
集に遊女の名をとむる月 翁
鹿笛にもらふもおかしぬり足駄 一栄
柴売に出て家路忘るる 川水
ねむた咲木蔭を昼のかげろいに 翁
たえだえならず万日の鐘 曾良
古里の友かと跡をふりかえし 川水
ことば論する舟の乗合 一栄
雪みぞれ師走の市の名残とて 曾良
煤掃の日を草案の客 翁
無人を古き懐紙にかぞへられ 一栄
やまめがらすもまよう入逢 川水
平包明日も越べき峰の花 翁
山田の種を祝う村雨 曾良

高野平右門は一栄である。彼の家は最上川の土手沿いにあった。
たしかに尾花沢の歌仙に比べて、できはよさそうだ。
一栄、川水と芭蕉、曾良との落差はまだまだ大きいが、

爪紅うつる双六の石 川水
巻揚る簾にちごの這入て 一栄
煩ふ人に告る秋風 翁

この運び
「爪紅うつる」は妖艶、稚児が簾のうちにはいいってと
恋で受けて、芭蕉の恋離れがあっさり

水かはる井出の月こそ哀れなれ 川水

川水 意表をつかれたか「哀れなれ」は重い。

ねはんいとなむ山陰の塔 川水
爰た村はうき世の外の春富て 翁
刀狩する甲斐の一乱 曾良

この3句の運びドラマチックだ。
浮世と離れたのどかな村にも、騒乱の煽りが
「爰た村」も目を引く語だ。

21 新庄

まず駅を通りこしてハンドブックにある氷室の清水に。

小さな池に小さな柳に小さなお堂。そして句碑。

水の奥氷室訪ねる柳かな 芭蕉

この句風流亭での三つもの。

水の奥氷室訪ねる柳かな 翁
ひるがほかかる橋のふせ芝 風流
風渡る的の変矢に鳩鳴て 曾良

6月2日(旧暦)風流亭に宿したときのものか
三つもので終えたのは、旅のつかれもあるだろうし、翌日新庄の同好の土との
俳諧の予定があったからだろう。

芭蕉の句 曾良が先に調べておいた歌枕によるものか
その句碑の裏に
涼しさや行先々へ最上川 蓼太
天明元年に作られた句というから、蓼太という俳人、それ以前かそのころ
活躍した俳人であろうが
この句蓼太の実感であったかもしれないが、よく芭蕉の陸羽の旅を捉えている。

すずしさを我やどにしてねまる也 尾花沢
五月雨を集めて涼し最上川 大石田
涼しさや海に入りたる最上川 酒田
温海山吹浦かけて夕涼み 酒田

陽暦の7月の旅、涼しさがなによりもありがたかっただろう。
蓼汰という俳人も芭蕉の陸羽の旅をなぞったのかもしれない。
新庄駅を通ると新幹線の工事中、どこが駅かわからない。
雨が降り始めた。47号線を西へ、本合海へ。
本合海でガソリンがなくなった。寄ったGS。
給油の女性、ナンバープレートをみて
「小田原で神奈川県ですよ。私学校出てすぐ横浜に行ってたんですよ」
何か理由があってUターンしてきたんだらう。でも横浜は彼女にとって
悪いことばかりではなかったようだ。
「旅行ですか」
「芭蕉のおくの細道の跡を、これでね」
「ここにも芭蕉のなにかがありますよ」
「そこにいこうと思ってる」
「すぐ近くですよ。このまままっすぐ行ったら書いてありますよ」

本合海 芭蕉等が最上川下りの舟に乗船したところである。
本文では大石田で日和を待っていたことになっているが、実際は新庄。
新庄から本合海まで10Km強。
芭蕉等が乗船したときは晴天だったというが、雨がはげしく
5月19日だというのに肌寒い。
芭蕉、曾良の像が濡れそぼっているのも寒々しい。

芭蕉等はここから舟で下り清川で下船した。
今最上川芭蕉ライン舟下りというものがあるが、もっと下流で
古口から草薙間となっている。私は47号線を行くでしょう。
途中道の駅、なぜか高麗風の建物。中に入ると韓国の物産が売られている。

モッコリ(韓国どぶろく)を買う。早くどこかの宿へしけこんで、一杯やろう。
あした雨があがったら舟下りにでも乗って、白糸の滝、
青葉なお隙、隙に落ちる滝とやら眺めて一杯やるのもいいなんて
思ったのが誤算だった。
少しいったら民宿の看板がでてたこともいけなかった。

清川は本合悔から陸路で24Km程度。
かつては酒田藩の主要な港だったというが、今は偲べるものもない。
関所の跡は学校に。裏庭には句碑
おなじみの 五月雨を集めて早し最上川
揮毫もおなじみの楸邨
芭蕉上陸の地と記された柱が根元から折れて横になっているのがわびしい。
曾良、尿前の関で懲りていたから、出手形の準備は怠らなかったが、
添え状に不備があった。

日記>舟つぎで番所に至る。平七より状添方の名忘れたり。
状不添して、番所ありて、舟よりあげず。

日記ではそこまだが、そのあとに羽黒山の道行きがかかっているから
、結局はあがれたのだろう。曾良なかなかしぶとい。
学校の説明版には
添状関手形が不備で役人に連れなくされ辛うじて上陸した
と書かれていた。

清川 16:30 そのまま羽黒山に向かえば其の日のうちに
羽黒町あたりに宿がとれたのだが、最上川ライン下りに未練があった。
で看板で見た民宿に。夜更けにしにつく雨。

新庄で歌仙が巻かれている。七吟、大人数だ。
捌は孤松というひとらしい。
この歌仙 発句 風流、脇 芭蕉。では芭蕉が仮の亭主を努めているかという
そうではない。

発句 御訪に我宿せばし破れ蚊や 風流
脇 はじめてかほる風の薫物 芭蕉
第三 菊作り鋤に薄を折添えて 孤松

ちょっと発句らしからぬ発句だが、さすが芭蕉、
破れ蚊や(蚊帳)を吹き抜ける風を 風の薫物と。

涼しくていいおうちですね。まーなんと風のきもちいいこと
という感じか。
新庄では三つものが、もう一組ある。

盛信亭
風の香も南に近し最上川 翁
小家の軒を洗ふ夕立 柳風
物もなく麓は霧に埋もれて 木端

最上川の川風に「南」を感じた。これはどういうことだろう。
太平洋側に住んでいる人間にとって南といえば「海」、直感的には。
芭蕉は太平洋側から初めて日本海側に抜ける旅、内陸部を通過して

最上の大流に接したとき、かすかに海の匂いを感じ取ったということだろうか
もっこの酔いが回ってきた。

22 羽黒山

雨で寝付けず、明け方とうと。5月20日
遅き朝勧められるままにとろろ汁 心太

肌寒い朝だった。宿を出て47号線へ合流する道が混雑している。
やはり通勤時間帯は込むものかと思ったら、みな車が戻ってくる。
少し行くと看板。土砂崩れのため通行止めと。
昨日の大雨でくずれたか。しかたなく宿に戻って少し待機。
待機してみてもいつ再開するかわからないという。
宿に居てもしかたがない。とりあえずどんな状況か行ってみよう
車が何にも走っていない道を。前方に通行止めの柵、警官が。U-ターンの合図。
「羽黒山へいきたいんですが」
「戻ってな升形の交差点を左へ行って、真室川廻ってくれ」
真室川!40何年ぶりに聞いた地名だった。
私の腹違いの兄が、当時何の仕事をしてたのか
酒を飲むとよく歌ったのが真室川音頭だった。

私や真室川の梅の花 貴方またこの町の鶯よ
花の咲くのを待ち兼ねて蕾の中から通って来る

真室川か いってもいいな、どうせ最上川の対岸だろう。
軽く考えたのだが、
途中であった老人に升形の交差点を聞く。土砂崩れ云々。
「ひでーこと言いやがる」と老人が憤慨する。
「そんなちいさいバイク少しひっぱってきやいけるだろうに」

柘形、鮭川、真室川、八幡町、松山町、立川町、清川、羽黒町

なんと民宿から111km、不通でなければ20km程度。
昨日清川からそのままいけば15,6kmだったのだ。
途中八幡町から遊佐、象潟へ抜けて逆コースで酒田、羽黒山と行くことも
考えられたのだが、少し意地になっていたのかもしれない。
まー真室川を渡り名高き梅園をかすめ、松山町の風車を眺めたのだから
いいとしよう。

出羽三山神社の登拝口の駐車場に着いたのは、
それでも14:25
随神門をくぐってしばらくいくと五重の塔。
杉木立の中の五重の塔は荘厳というよりも暗鬱。
室町初期のものだという。
杉木立の道をたどって二の坂。
ハンドブックのお勧めの茶屋に。
このハンドブック、商業的なことは、書いてないのだが
この二の坂の茶屋についてはさりげなく
>二の坂を登ると左側に茶店があり名物の力餅その他で
>一休みして鋭気を養うがいい。
力餅その他ね。しっかり書いてある。

広縁で甘酒をいただく。
「どちらからおいでになりました」
「神奈川県の小田原です」
「そりゃ遠いところから バイクですか何時間ぐらいかかりましたか」
「芭蕉のおくの細道のコースを50ccで辿ってまして、深川を五月九日でしたから
12日かかってますか」
「そりゃーすごい」
「おくの細道の旅ハンドブックというのを頼りにしております」
「あー久富先生の あの先生よくいらっしやいましたよ」
「こちらのお店のことも」
「あはは、あの先生、自分の足でお調べになってるから」
「本当に細かくしらべてあって、助かってますよ」
「本坊へ行かれますよね 証明書発行しておきましょ」
「えー」
「羽黒山の階段xxx段踏破証明です。4時ぐらいで茶店を閉めてしまうかもしれ
ませんから」

ありがたくいただいたが。帰り4時を回っても、茶店は開いていた。今度は心太を。
二の坂や上り甘酒下り心太 心太

茶店の少し上に三日月塚、灯籠の間にただ芭蕉と書かれた塚がある。
ハンドブックによれば
「ひかり増せ燈籠の月も三日の影」という句があったそうだが
見落としている。この句の意味はとかがえると？
燈籠の灯口が三日月形であったか。この句、芭蕉の句ではない。
どうせ三日月塚をつくるなら、

涼しさやほの三日月の羽黒山 芭蕉
も刻んでほしかった。なお坂を登る。

羽黒山仰げど伏せど杉梢 心太

右に折れて南谷へ。
芭蕉等が滞在した南谷の別院があった。
今は何も無い。荒れた池とかつての礎石と句碑

ありがたや雪をかほらす南谷

これは本文だが
書留掲載の発句では

有難や雪をかほらす風の音

羽黒山本坊においての興行。眼前当季というのが建前だであるし地名は出さない。
この句、本坊の一室か、歌仙の開始、満座固唾の中で芭蕉の発句を待っている。
芭蕉はすでに発句を決めてある。だが待っている。
一陣の身震いするほどの涼風、
有難や と 芭蕉は句を発する。

発句はそれでいいのだが、独詠としてみた場合重い。
雪、香り、風の音と、視覚、嗅覚、聴覚とぎっしり。で本文の形へ

ハンドブック>前文の「南谷の別院に舍して」との照応をはかり、会覚への謝意を含ませたものであろう

其の通りだと思う。ただ

>推敲のあとがしのばれて興味深い

それは賛成しかねる。句は場によって変わるということだ。

最上からの芭蕉の句を追えば
風の香も南に近し最上川
はじめてかほる風の薫物
この延長、最上川を羽黒山の風景に置き換えれば
ありがたや雪をかほらす南谷
が出現する。

ついでにこの本坊での歌仙での曾良の句をみると

第三 川船のつなに螢を引き立てて 曾良

この句を出された時に芭蕉、苦虫つぶしたか
この句、大石田での興行で

五月雨を集めて涼し最上川 翁
岸に螢をつなぐ舟杭 一栄

この一栄の短句を長句に伸ばしたような句。
特に発句についで丈高き第三であるべきところを、
脇の句を引き伸ばしたような句ではどうしょうもないだろう。
この巻き上がった写しは大石田の一栄の元にもたらされるだろうと思うと
芭蕉背筋がさむくなっただろうな。
多分、芭蕉、曾良とも疲れきってる。

さて南谷、庭の跡というような庭
朽木の幹が横たわっている。その朽木から若い枝が。

ありがたや朽木に若葉の南谷 心太

それよりも芭蕉のこんな句を思い出す。

酔って見りゃ谷の朽木も仏かな 芭蕉

これはどこで作られた句だったのだろう。黒羽だったか
ここ羽黒山の本坊で酒を振舞われたと日記に。

23 酒田

5月20日 19:00 鶴岡駅近くの旅館へ
いわゆる商人宿へ
この日 125Km 風の中を走って、羽黒山の登拝で3時間20分
疲れきって寝る。

未明激しい雨と落雷、商人宿の二階を揺るがす。
積もりしもの吐き出したか朝の雷(らい) 心太
朝6時にはピタリと止む。
朝の雷などは、小田原ではめったにない。
宿の主人に聞いてみると、このあたりではよくある気象らしい。

芭蕉等も鶴岡に疲れきって到着した。申の刻(午後4時)長山重行宅に。
粥を所望して、夜まで寝て4吟。
一巡でやめ。翌日は朝から初めて昼前に、芭蕉の体調不調で中止。
南谷から月山、湯殿の登山、頑強な曾良ですら、「甚勞す」と書いてるくらいだから
芭蕉も相当疲れていたのだろう。
本文で羽黒山で会覚の求めに応じて残したとされる句は

涼しさやほの三日月の羽黒山
雲の峰幾つ崩て月の山
語られぬ湯殿にぬらす袂かな

さて羽黒山本坊での興行でも、芭蕉と曾良は疲れきっていると書いたが
ではここでの興行はそう出羽なのだ。

めづらしや山をいで羽の初なすび 芭蕉

この茄子 鶴岡特産の民田茄子というらしい。
いで羽は出羽であり、出羽のめづらしい茄子と、(羽黒)山を出でとに
かけた挨拶句。まず粥を食べ、そのときの漬物にでたものか
眠らせてもらったあとではこういう句もでてくるかな。

私は朝の雨上がりの道を3km重行宅跡、そして大泉橋。
ここから芭蕉と曾良は川舟にのって酒田へ
川舟の涼しい旅は二人には有難かったろう。

舟の上七里也、陸五里也と

たしかに重行宅跡から酒田駅まで23.5km
陸路五里はかわらないか、水路は大分蛇行していたか

芭蕉が尋ねた不玉亭には記念碑があるだけだが

芭蕉逗留の地 不玉宅跡
三人の中に翁や初真桑 不玉

さてこの句こんな雰囲気の中でできたという。

日記では
廿三日 晴。近江ヤ三良兵へへ被招。夜に入、即興の発句あり

この即興の発句 書留には残されていないが、この地に芭蕉の真蹟として
残されている。

あふみや玉志亭にして納涼の桂興に
瓜をもてなして発句をこふて日
句なきものは喰事あたわじと戯れければ

初真桑四にや断ン輪に切ン はせお
初瓜やかぶり廻しをおもひ出ツ ソラ
三人の中に翁や初真桑 不玉
興にめでてころもとなし瓜の味 玉志

ずいぶんとくつろいだ芭蕉の姿がある。不玉の句はそのくつろぎの姿の
スナップショット。この句、発句といっても上の風景、上の句があつてこそ
味わい得る句か

不玉亭から日和山へ
石巻にも日和山があつた。強い雨と風の中で芭蕉像をみた。
日和山への道には山車が出、坂道には屋台が出ている。

雨上がり祭り日和の山の坂 心太

芭蕉像があり芭蕉の句碑がある。
温海山や吹浦かけて夕涼み
暑き日を海に入りたり最上川
初真桑四にや断たん輪に切らん

芭蕉の句碑のあるところ子規の句碑が

夕涼ミ山に茶屋あり松もあり
鳥海にかたまる雲や秋日和

毎度のことながら芭蕉を意識すると子規はさえない。
子規が芭蕉より蕪村を持ち上げたのも、芭蕉コンプレックスなるものが
あつたんじゃないかと思えてくる。
一度機会があつたら子規のおくの細道についても調べてみたい。
酒田から象潟へ行く途中、また強風に煽られる。
真室川でヘルメットの緩んでいたボルトがすっとんでいた。
フェイスカバーが強風でねじれる。丁度見えたホームセンターでヘルメットを
買う。KIGNAS のヘルメットだったがそこに捨てる。

風の町サヨナラも言えぬ 心太

24 象潟

5月21日 14:09 象潟駅前へ
酒田駅前からおよそ50km。
芭蕉と曾良は酒田から舟で象潟へ向かったが、今回は爽快な舟旅とは行かなかつた。
6月15日小雨の中を出たが吹浦の手前で大雨にあい、吹浦で一泊。
翌日雨に降られながらも昼過ぎ象潟へ。
この間、関所との関係で陸路をはさんだものか、曾良の記述ではあいまい。

松島は笑うが如く、象潟は恨むがごとし。と本文。
私のめぐり合わせでは松島は大雨で寒く、象潟は晴れて蒸し暑かつた。
松島の島巡りは5月17日の朝だった。
松島は恨むが如しで象潟は？
1805年の大地震で海底が隆起し、九十九島八十八潟といわれた景観も
今は水田と化してしまっている。

干満珠寺からは、水田の中に散在する小山が、かつての島影と知れる。

干満珠寺には芭蕉像と句碑
象潟の雨や西施かねふの花
これは象潟滞在時に詠まれたもの雨にたたられた芭蕉の実感だったのだろう。
それが本文では
象潟や雨に西施がねぶの花 となった。
天能くはれて朝日花やかにさし出た、そんな日に詠まれたことになっている。
松島と対極にする工夫というのが大方の意見でたしかにそう思わざるを得ないが
何か腑に落ちぬものがある。

というのは松島と象潟の比喻

、
> 倅松島にかよひて、松島は笑心が如く、象潟はうらむがごとし。

では誰が笑い誰が恨むのか 同じ人間の表裏。
西施である

象潟や雨に西施がねぶの花
ならばなぜ
松島やxxxに西施がxxx
がない。
松島があまりの絶景だったから芭蕉が句を詠めなかったなど
観光ガイドが「あー松島や松島や」などというが
たしかにその場で句を詠まれてはないが、
おくの細道の執筆時に何とでもなっただろう。
現に冒頭の
> 行く春や鳥なき魚の目は泪
にしても旅吟としての記録はなかった。

> 蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ
の対象として執筆時に作られたものであろうと推測した。

対極にしたいなら同様な手法を松島に適用してもおかしくない。
だがしなかった。
松島に句を挿入しなかった「積極的」な理由を探ってみてもいいはずだ。

西施とはご存知の通り呉越の闘いの中に登場するヒロイン。
会稽の闘いで破れた越王句踐が呉王夫差に
貢物として贈った女性が西施だった。
彼女の色香に夫差は溺れ、政をおこたり
諫言する忠臣伍子胥に死を命じる。
弱体化した呉は越に攻め込まれほろび夫差も殺される。
西施は呉を滅ぼすための武器として送り込まれたことになる。
西施はその後西湖に身を投げ死んだというが。

とすれば西施の笑いにも憂いを芭蕉はみているだろう。
西施を軸に松島、象潟を描けば対極でなくて、連続なのだ。
その笑の底の憂いをみれば
象潟や雨に西施がねぶの花
で、奥の名勝を括りうることになる。
そして本文の唐突の祭礼も意味深くなってくる。

ちょうど象潟の熊野権現の祭礼と重なったこともあるが

祭礼

象潟や料理何くふ神祭 曾良

熊野権現の祭りでは、魚を食べない慣わし、漁村の「魚供養」を兼ねてであろうが
曾良は折角の漁村で魚を食べずに何を食べるんだと詠んだわけだ。

これを本文に採用した芭蕉には、
西湖に身を投げた西施と重ね合わせた、
魚を食わぬことは西施の霊祭りにふさわしいと。
また洞庭・西湖を松島の比較に出したのは西施を出したかったためではないか。

象潟から25 Km 戻って遊佐の旅館にとまる。
街道沿いに旅館が2軒ならんでいる。温泉と書かれている。
西側の旅館に泊まる。
数奇屋づくりの続きの間がある部屋。
部屋からは間近に日本海。湯は薄墨色。

「料理何食う」と部屋に戻れば、日本海の魚が並ぶ。
ほろ酔いの頭に。そうか！
「おくの細道」の終点は大垣だが、
「奥」の細道の終点は、象潟なのだ。
落悟への手紙にも
みちのく・三越路(みこしじ)の風流佳人のあれかしのみに候
と書いているではないか。
だから西施で奥の景勝をくくり、祭りでめた。
そう考えると越後路の大幅な省略がみえそうだ。

25 村上

5月22日、快晴。
象潟へ少し戻ってブルーラインを登って鳥海山へ
5合目にまだ雪が残っている。
爽快な風が吹く。芭蕉の「雪をかほらす」とは
こんな空気を言うのかと納得する。
展望台に登れば弓なりの美しい海岸線。
遠く男鹿半島、佐渡まで見えるというが、水平線
近くに霞がなびいていて、確認できなかった。
展望台の下の駐車場。
私のバイク(バイク型スクーター CityMagic)の周りに人だかり
人気ものになっている。

象潟から芭蕉は船で酒田まで。行きは雨で難儀をしたが
帰りは爽快な旅だったらしい。
日記>一八日 快晴。早朝、橋迄行、鳥海山の清風を見る。飯終て立。
あい風吹いて山海快。暮に及て酒田に着。
あい風(あゆ風)とはこの地方の東から吹く風

「山海快」なんとも気持ちよさそうだ。
私は鳥海山を西に下って吹浦へ出、海岸線を酒田へ。
土門拳美術館を見る。

さて芭蕉は越後路を辿って金沢を目指すのだが
本文の越後路の記術はわずかである。
あまりに短いからそのまま記載すると

<越後路>

酒田の余波(なごり)日を重ねて北陸道の雲に望。
遙々(えうえう)のおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百三十里と聞く。
鼠(ねず)の関こゆれば、越後の地に歩行(あゆみ)を改(あらため)て
越中の国一ぶりの関に到る。この間九日、暑湿の労に神(しん)をなやまし
、病おこりて事をしるさず。
文月や六日も常の夜には似ず
荒海や佐渡によこたふ天河(あまのがわ)

この一節には誤りというより虚構が2箇所ある。

一ぶり(市振)は越中でなくて越後である。
この間九日でなくて日記によれば16日、
市振までとしても15日かかっている。
「病おこりて事をしるさじ」も虚構くさい。

その虚構についてはおいおい話ずとして
「酒田の余波(なごり)日を重ねて」
酒田には象潟をはさんで、前2泊、後7泊している。
その間に歌仙1巻と例の瓜くわんの発句。

歌仙の三つ物を並べてみると
温海山や吹浦かけて夕涼み 翁
みるかる磯にたたむ帆筵 不玉
月出ば関やをからん酒をもて 曾良

三吟の歌仙なのだが書留の記録では、
時々詠み手の名前が抜けている。
執筆が詠んだときは名前を書かない例はあるが
不玉のあとだから不玉が二句続けて詠んだものか。

この芭蕉の句 得意の挨拶句だが地名が2つも詠み込まれている句はめずらしい。
温(あつい)と吹くのとあわせて面白みを感じたのだろう。
酒田を出て芭蕉は温海、村上(越後)へと足を進める。

6月25日(旧暦)大山(山形県鶴岡市)
26日 温海 (山形県温海町)
27日 中村(新潟県山北町)
28日 村上 (新潟県村上市)

これらの宿には弥三郎(低耳)の添状で宿泊している
低耳は象潟へ芭蕉を追ってきて、象潟、酒田と随行している。
美濃の商人だという。
越後路、芭蕉と曾良は彼のルートで宿を紹介してもらっている。
27日温海の宿を出て芭蕉は馬に乗って鼠の関跡へ、曾良は温海の湯の源泉地へ。
めずらしく2人が別行動。大石田でも別行動はあったが、
そのときは曾良が疲れて切っていた。
どこで芭蕉と曾良は合流したかわからないがその夜は中村へ

鼠の関というのは、勿来、白河と並んで奥羽三関と呼ばれる。
頼朝に追われる義経主従がこの関を越えて、安堵の胸をなでおろした。
この関の何某が義経主従に休息の宿を提供している。
衣川で義経を偲んで涙を流した？芭蕉にとっては、
どうしても見たかったところだろう。
それを承知の曾良が同行しなかったのはやはり謎めいている。
それにしても芭蕉の単独行、曾良との別行動のときも誰かが同行していた。
もっと奇妙なことは、鼠の関は村上への途中。温海の湯本はむしろ酒田より。
馬で行った芭蕉を、遠回りした曾良が徒歩で追いかける。
それを解く鍵のようなものが村上にあるのか。
今の鼠の関跡には芭蕉の行動の跡を示すものは何もない。

中村から葡萄峠を越えて村上へ。当時海岸沿いの路はなかったのか
私としては{笹川流れ}経由で行きたかった。
というのは1994年車で新潟から山形へ抜けた時のコースだった。
葡萄という地名は珍しい。この地名の響きに曾良も応じている。
日記>到蒲葡(名に立程の無難所)
何故葡萄(ぶどう)が名が立つのか、
ぶどうは武道、武動でもあった。勇ましい響きだが、
さほどの難所ではなかったと言っている。
現在は近くにブドウスキー場がある。
村上に着いたのは申の上刻 午後4時ころか
宿に荷をおいて、曾良、直ちに村上城へ。
芭蕉が一緒だったかは定かではない。

この辺を日記から抜き出すと

28日

申の上刻に村上に着、宿借て城中へ案内。喜兵・友兵来て逢。
彦左衛門を同道す。

29日

昼時、喜兵・友兵来て(帯刀公より百疋給)、光栄寺へ同道。
一燈公の御墓拜。

喜平というのは村上藩士。友兵もおそらく。
問題は案内。曾良が案内するとすれば芭蕉しか考えられない。
神社仏閣、歌枕の案内なら、芭蕉はどこへでも行くだろうが
城中と聞かされて怪訝に思っただろう。
ただ曾良の文章、能動と受身がはっきりしないことがおおい。
案内された考えたほうが自然か。
どう言う形であれ城に入るとすればそれなりに手はずが必要。
すでに城中の一室で喜兵・友兵とあうことになっていたような書き様。
またそこから彦左衛門(村上藩士か)を同道して(されて)、どこへいったのか。
これも不明。
翌日宿へ喜兵・友兵が来て帯刀公よりと百疋給
帯刀公というのは村上藩の筆頭家老。疋というのは通貨の単位。
銭何枚かを紐に通して輪にしておく。それが一疋だという。
一疋の銭の枚数もわからないし、現在の通貨としてどのくらいになるのか
、今後調べてみたい。
一燈というのは帯刀の父の良兼の法号。百疋の礼も兼ねてということになるか。
そうすると28日、彦左衛門を同道して行ったのは帯刀の屋敷。

で帯刀には会えなかった。会えれば帯刀と書いたであろう。

村上でのあわただしい動きは、金策だったということになる。路銀の融通。それにしても曾良の手際がいい。城へ行く前にすでに手はずができていたように思える。ではどこでといえば「温海」が思い浮かぶ。芭蕉と曾良の不可解な別行動。そのとき曾良が手はずを決め何かの伝で喜兵・友兵と連絡を取った。可能性としてある。ただ国境(藩境)を跨ることを考えると難しさも感じる。

曾良と村上藩との接点はどの辺にあったのだろう。
曾良の生涯をざっと眺めると
諏訪で高野七兵衛長男として生まれたが、
すぐ母方へ引き取られ、叔母夫婦の養子となる。
12歳、養父、養母とも相次いで死。伊勢長嶋の叔父を頼る。
20歳、長嶋藩に仕官
33歳、致仕(退職)
江戸に出て神道を吉川惟足(きっかわこれたり)に学ぶ。
35歳、芭蕉と出会う。
41歳、芭蕉とおくの細道の旅へ。
43歳、近畿巡遊。
46歳、俳諧の師、芭蕉客死。神道の師、吉川惟足没。
54歳、更級行脚。
61歳、幕府巡検使の随員となる
62歳、巡検に赴いた壱岐で客死。

曾良の生涯も陰影に満ちている。

さて接点があるとすれば

- 1 長嶋藩士とき、村上藩士と親交があった(江戸詰?)
- 2 吉川神道の同門に村上藩士がいた。
- 3 芭蕉門に村上藩士がいた。

芭蕉門下で村上藩士はきかないから、3はなさそうだ。

1か2だろうと考えられるが、
2は薄いかもしれない。
なぜなら曾良が光栄寺、翌日泰じ(?)院という
榊原家の菩提寺に参拝している。

なにも曾良が神道家だからといって
墓参をしないというわけではない。神仏の峻別などというのは明治以降であって
それまでは大方神仏混交であった。
それに曾良が頼った叔父というのは伊勢長嶋の寺の住職だといわれる。
曾良は少年期、青年期に仏教に親しんでいたともいえる。
それ以上に当時の人情として、「人の尊しとするものは尊しとせよ」だったろう。
日本では深刻な宗教戦争がおきなかった理由でもある。
それよりも帯刀が面識のない芭蕉と曾良に百疋を与えた「名目」。
少し想像を膨らませてみよう。

- A 彦左衛門あるいは喜兵・友兵
- B 帯刀

A 城下に江戸の俳諧師が参っております

- B 俳諧とは？
 A 連歌を下世話にしたもののように心得ます。
 B 連歌かあれは苦手じゃ
 B でそれがどうした。
 A お目通りを願っております。
 B 俳諧師が？
 A 俳諧の興行、つまりは路銀に窮しております。
 B そのもの達のなりは？
 A 剃髪、法体にございます。奥羽行脚の帰りと称しております。
 B 坊主か ではそのように扱え
 A かしこまりました。

29日の昼過ぎ喜兵・友兵が芭蕉の宿を尋ねる。

- A 喜兵・友兵
 A 「我が主が申しますに、諸国行脚の御坊。
 さぞ功德を積まれしや。されば我一族の菩提に
 余りし功德を手向けたまえ。と」
 銭と覚しきものを差し出す。
 芭蕉何かいいたげに口籠もるが、曾良はすまして
 「かしこまりました。直ちに参りましょう。」
 A 「さればご案内つかまります。まず光荣寺へ」

ま一神道なかまだったら、曾良に坊主をよそわせはしなかつたろう。

1999年5月22日 その日私は
 遊佐一鳥海山一温海一山北町北中一葡萄峠一村上 走行175Km
 山北町の路傍に「おくの細道」文学碑の標識。
 左に折れて行けば田の中の小公園。
 日記の中村(山北町北中)の一節が引用されていた。

今日も折々小雨す。及暮、中村に宿す。
 28日 朝晴れ。中村を立、葡萄に到る

旅人の濡れそぼるや文学碑 心太

葡萄峠を越えて朝日村にはいったころ

何日の月か鉦で割ったような 心太

村上茶栽培の北限だという。数年前ここの番茶がサライという雑誌に紹介され、
 私は川柳(かわやぎ)という番茶を買ったことがあった。
 風呂上り夜の町へ 8時を少し回っただけだが、商店はみなしまり
 街頭がほのかに灯る。

老夫婦の夜の散歩 手を振る 心太

26 出雲崎

さて村上を発ってからの芭蕉の足取りである。
 7月1日 つる村(中条町)

7月2日 アイ風に乗っての船旅で新潟
7月3日 弥彦
7月4日 出雲崎

村上(JRの駅)から出雲崎(道の駅)まで150km弱

上の行程だと平均37,5km/日の進行、それまでの行程に比べて遅くも早くもない。

ただ宿を借りるにあたって、いくつかトラブルがあったらしい。

2日(新潟) 喜平方より大庄や七郎兵へ方状は愚状に入、反す。

喜平は前述の村上藩士である。

彼が紹介の労を取った「大庄や七郎兵」への状に、

曾良と芭蕉が立腹する文言があったということだろう。

ただ「反す」とは誰に返したのか、新潟の宿で飛脚にでも持たしたもののか？

結果七郎兵宅に泊まれない二人は、一夜の宿を探さなければならなくなった。

日記>新潟へ申の上刻、着。一宿と云、追込宿之外は不借。大工源七母、有情、借。
甚持賞す

一晩の宿を求めたが追込み宿以外借りられなかった。追込み宿とは何か

本文の注によれば、「定数なく一間に客を詰め込む下級の旅宿」

この形の旅館というのが当時多かったと思えるが、

曾良は泣き付く。大工源七 旅宿の屋号なのか、それとも大工の棟梁の名か

その母の同情を買い、一間を借りる。持賞とはここでは有難いという意味になるか。

曾良の交渉能力は大変なものがある。村上藩での金策、手形の不備で再三難儀しながらも切り抜けてきた。

では何故、追込み宿では不都合だったのだろうか、芭蕉の疲労、病(これについてはあとで考えるが

)をいたわってのものか、それとも大庄屋の一室を振ったというのに追込宿では

面目が立たないということか。

それは残念ながらはっきりしないが、

村上での墓参と新潟で垣間見た追込み宿の記憶が、一振の虚構に繋がっていく

その翌日の3日。

曾良は馬を借りようとした。

ところが

>馬高く、無用之由、源七指図にて歩行す

馬高くというのは、馬丁に払う金という意味か。

高いだけで、役に立たないから歩きなさいよ

と源七に指図されそれにしたがった。

曾良が馬を借りようとしたということは

やはり前日、芭蕉の体調が思わしくなかったのだろう。

剛毅な曾良が源七の指図に従ったのは、

1 源七の母の昨夜の温情があるため、無視できなかった。

2 村上藩から無心した路銀がこれからの旅程のためには、

充分でなかった。

3 芭蕉自身が「もう大丈夫だ。歩いていこう」といった。

この3つのどれかというよりも、全てが重なってということだろうか。

最終的には3の芭蕉の言だろう。その日新潟は快晴だった。

日記>四日 快晴。風、三日同風也。

風はアイ風。東からの涼風に比較的楽な旅だったらしい。
四日夕、出雲崎へ。新潟から66 Km 程度を2日で。
快調な歩行といえるだろう。弥彦ではミイラに参拝している。
出雲崎あたりで芭蕉は荒海やの句を作ったのだと思われる。
(書留には7日、高田あたりでの披露となっている)
荒海や佐渡によこたふ天河(あまのがわ)
というのは出雲崎を出てからの道中、振ったりやんだりの雨に祟られているので
佐渡が見えなかったと思われる。

それともう一つの傍証が芭蕉園に
芭蕉園の石碑に銀河の序

畝ちごの駅出雲崎といふ処より佐渡がしまは海上18里とかや谷嶺のけむそくまなく
東西三十余里によこおれふしてまた初秋の薄霧立もあへず波の音さすがにたかからず
ただ手のとどく計になむみわたさるげにや
此しまはこがねあまたわき出で世にめでたき嶋になむ侍るをむかし今に到りて大罪
朝敵の人々遠流の堺にして物うきしまの名に立侍ればいと冷じき心地せらるるに
宵の月入かかる
此うみのおもてほのくらく山のかたち雲透に見えて波の音いとかなしく聞こえ侍るに

荒波や佐渡に横たふ天河

この序文許六所蔵の芭蕉真蹟。許六は芭蕉を訪ねて、
執筆中のおくの細道を読んでいる。その編集仮定でこの文章、除外されたのかもしれない。
可能性の一つとして、許六もおくの細道の編集に加担したとも考えられる。

さて私はというと5月23日、新発田郊外で大きなリサイクルショップが目についた。
数年間隔で日本をまとまった距離走ってみると、なんとなく日本の変化がわかる。
1980年代の前半はパチンコ列島、後半から90年前半まではコンビニ列島
そして90年代後半からはリサイクル列島。
それを象徴するように大きなリサイクルショップ。
家具、電化製品、台所用品、衣料品と小さなスーパーなみにそろっている。
真四角な透明のリュックを買った。バイクのハンドルに引っ掛ければ、ちょうどタンクの上に乗る。
うまくいけばリュックに地図を入れたままで見えるかもしれない。
だが補強用のネットが入っていて、地図はみづらい。
今そのリュックを見ながら書いている。なんと手前のカバー(そこもケースになっている)の裏側は補強用のネットが入っていない。手前のカバーを裏返しにすれば、
地図は見えたのだ。3年たって気付いた。
新潟港から海沿いの道を西へ、途中低くねじれた防砂林をぬけて海へ。
ちょとした砂丘。佐渡は見えず。日曜日だということに人影もまばら。

出雲崎の道の駅に着いたときは16:35分
村上から150km近く走ってきた。駐車場にハーレー軍団。
ごっつい車体に装備満載。デコデコ。
皮ジャンのオールドライダースタイルの男が私の City Magic を見て、
「これで小田原からきたんかい。どのくらい走った？」と聞いてきた。
「1800kmぐらい」
「えー」
「おくの細道のコースをたどってるんで」

「何日ぐらいかかってんの」
「今日で15日ですね」
「そりゃー豪勢やね」
「1800kmといたら、俺の五年分ぐらいや」
この人たちは、年に何度かのツーリング。威风堂々の大名旅行をしてる人たちが。
「あとのくらい走るんよ」
「あと1800kmぐらいかな」
「がんばってな」

そうかまだ半分なのか。夕暮れの気配。おそらく芭蕉もこの出雲崎で
里程の半ばだということを感じたであろう。

日暮れて道遠し翁も私も 心太

道の駅の案内図で宿に電話。
宿というより海の家。海岸に建て増し建て増しのバラック。

広間にはダイバーたちが車座。
その中から鬼女。というか山姥、海で山姥もないから海姥か。
じろりと私を見て
「おーし 泊めてやる セメント捏ねるか」
えー
ダイバーのリーダー格の人が、
「おばっちゃん さっきの電話のお客さんだよ」
電話に出たのはこの声だ。
「あはは また大変なのが来ちゃったかとおもってな」
どうやら無銭旅行の男がここに泊まったらしい。
その男に風体、身形が似ていたということか。

海姥いわく
「この人たっちゃかえちまうぞ、夜は俺と二人きりだぞ いいんか」
一瞬ぞー。車座のダイバーたちが笑う。

「風呂にはいりたい」
「よし あない(案内)する」

幸い何もなくて一夜をすごせた。朝の海に釣り舟が。

分別働かず 船影映す宿 心太

27 高田

越後路は長い。本文ではそっけないのだが、宿のトラブルは
続いたようだ。

日記>7月5日

至柏崎、天や弥惣兵衛へ弥三良状届、宿などと云付るといども、不快して出ず。
道迄兩度人走りて止。不止して出。小雨折々降る。申の下刻、至鉢崎、
宿たわらや六郎兵衛。

曾良、大変な立腹。引き止められても、侘びをいれられても、許せぬと。
こんなときに出てくるのが武士の曾良の顔。「宿などと云付る」。

一夜の宿をお借りしたいなどということがない。貸す方も立腹していたかもしれない。

この弥三郎のネットは、元来商人ネット、芭蕉や曾良の求める風流のネットとは違うものなのだろう。その辺、紹介状の書きかたにも問題があったのだろう。

日記＞7月6日

聴信寺へ弥三忌中の由にて強いて不止、出。石井善次良聞きて人を走す。不帰。
及再三、折節雨降出る故、幸いと帰る。宿、古川市佐衛門方を云い付る。

これは相手に非はなさそうだが、忌中で泊まれないなら、
すぐに他の宿を手配してしかるべきだという曾良の感覚がありそうだ。
再三の侘び。「折節雨降出る故、幸いと帰る」雨が落しどころになったか。
聴信寺は現在の上越市直江津にある。
夜になると二人の機嫌は直ったらしい。

日記＞夜に至て、各来る。発句有。

その発句というのは本文にある

文月や六日も常の夜には似ず

ただ 各(おのおの)来るのだ。発句だけで済む訳はない。
書留では

直江津にて

文月や六日も常の夜には似ず	はせお
露をのせたる桐の一葉	左栗
朝霧に食焼煙立分て	曾良
蟹の小船をはせ上る磯	眠鷗
鳥なくむかふに山を見ざりけり	此竹
松の木間より続く供やり	布囊
夕嵐庭吹払ふ石の塵	右雪
たらい取巻賤が行水	筆
思ひかけぬ算をつたふ鳥一つ	左栗
きぬぎぬの場に起きもなをらず	曾良
数々に恨の品の指つぎて	義年
鏡に移す我がわらひがほ	翁
あけはなれあさ気は月の色薄く	左栗
鹿引きて来る犬のにくさよ	右雪
きぬた打つすべさへ知らぬ墨衣	眠鷗
たった2人の山本の庵	左栗
華の吟其ま暮て星かぞふ	義年
蝶の羽おしむ蠟燭の影	右雪
春雨は髪剃児の泪にて	芭蕉
香は色々に人々の文	曾良

時間の都合か20句と変形。

鄙びた俳諧だが芭蕉生き生きしている。
俳諧ができれば、風流乞食の面目躍如。
だが曾良はくすぶっている。

文月や六日も常の夜には似ず はせお

明日が七夕と思えば今宵もなにやら趣きがあつて
という恋の呼び出しにもなりそうな発句。
そんな夜に皆様に会えて嬉しゅうございます ということろか。

数々に恨の品の指つぎて 義年
鏡に移す我がわらひがほ 翁

この笑い顔、ゆがんでいるか、さばさばした後の笑か
映す、写すじゃなくて移すなのがいい。

文月や六日も常の夜には似ず
常の夜ならぬ7日、朝から雨。曾良出立を躊躇。

日記>7日 雨不止故、見合中に、聴信寺へ被招。再三辞す。
強招くに及暮。

7日の夜も、歌仙と俳。

星今宵師に駒ひいてとどめたし 右雪
色香ばしき初刈の米 曾良
暴水躍に急ぐ布つぎて 翁

注 暴 さんずいがつく

餞別
行月をとどめかねたる兔哉 此竹
七夕や又も往還の水方不覚 左栗

日記>8日 雨止。欲立。強て止て喜衛門饗す。饗畢、立。

どうも曾良は早く直江津を離れたがっている。五日からの不快感が
尾を引いているのか、それとも路銀の減り具合か。あるいは急ぐ理由が

直江津を出てやれやれというのに、今度は高田でつかまる。
直江津から高田、わずか一里半である。
結局、8、9、10と高田で足止め。その間歌仙の興行が催されるのだが
曾良は不機嫌である。
曾良という男は不思議な男である。
未知の俳人と手合わせする喜びなどというものは、感じていないようだ。
どこで誰と詠んでも同じような調子である。
蕉門でも曾良の句というものは話題にならないし、歌仙にもあまり名を連らねない。
おくの細道では芭蕉に同行しているから、宗匠役の第三がまわってくるが。

この旅の側面として、各地の風流の士と交わり蕉風を広めようとするものがあつた。

みちのく・三越路(みこしじ)の風流佳人のあれかしのみに候
安川落梧への手紙にもある

それにしても、この直江津、高田では対応は疑問である。

当初越後での蕉風伝播の拠点を村上に考えていたのではなかったか、
其の当てが外れたわけだから直江津、高田は願ってもないところなのだが。

さて私はというと

5月24日 9:30 直江津駅前、そこから琴平神社へ。

神社の境内に

文月や六日も常の夜には似ず はせお
の句碑と安寿と厨子王の供養碑。
供養碑の前の空き地で老人達がゲートボール。日本海が其の向うに広がる。

安寿恋しや厨子王恋し 海にころがるゲートボール 心太

直江津には過去2度私はきている。最初は20代
ちょうど小田原に帰っていた。
小田原の海の水(太平洋、相模灘)を浜で拾った小ビンにつめ、
そのまま歩き続けて7泊8日、なにも持たずの野宿だった。
直江津の海についたのは、真夜中。
その日、花火大会だったのか、花火がおわってもまだ浜辺に人が屯していた。
私は太平洋の海水を日本海にそそぎ、上野行きの夜行に乗った。
二度目は40代。
軽の1BOXでの旅 20代の旅をトレースしてみた。
直江津から少し新潟へ向かった道路の端で車の中で寝た。

そして三度目は芭蕉の旅のトレースだった。
思い出しても詮無し佐渡は見えぬ 心太

高田の駅からだらだらした坂道を登って対米館。

葉欄にいずれの花をくさ枕 はせ翁

の句碑を見てから金谷山公園へ 日本のスキーの発祥地とか。
ある連句でこんな句を投げたことも

二 沢山滑りスキーを上達 ラ
三 曾良記す越後高田は「折々小雨」 心

28 一振

7月11日 高田を出て、能生、
12日 糸魚川をへて市振りに。

能生から糸魚川の間の早川で
日記>翁つまづかれ衣類濡、川原暫干す。

なにやらほほえましい一齣でもある。

日記>13日 市振立。・・・
中・後の境、川有。渡りて越中方、境村と云。加賀の
番所有。・・・
人を雇いて荷を持せ、黒部川を越。申の下刻滑川に着。

11日から晴れたといっても、黒部の水嵩は相当なものだったのだろう。

前日、早川で芭蕉がつまづいているし、曾良大事を取ったものだろう。

日記から書きだしたのは、
すでにふれた本文の記載の虚構について考えなければならなくなってきたから。
本文の越後路の段を再掲すると

<越後路>

酒田の余波(なごり)日を重ねて北陸道の雲に望。
遙々(えうえう)のおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百三十里と聞く。
鼠(ねず)の関こゆれば、越後の地に歩行(あゆみ)を改(あらため)て
越中の国一ぶりの関に到る。この間九日、暑湿の労に神(しん)をなやまし
、病おこりて事をしるさず。
文月や六日も常の夜には似ず
荒海や佐渡によこたふ天河(あまのがわ)

この段には誤りというより虚構が2箇所ある。

一ぶり(市振)は越中でなくて越後である。
この間九日でなくて日記によれば16日、
市振までとしても15日かかっている。
「病おこりて事をしるさじ」も虚構くさい。

まずこの虚構

1 越後で16日要しているのに、9日としたのは、当時
越後路九日と旅程として知られていたという。たしかに直江津、高田での長期滞在
などを差し引きすれば、あながち無理な数字ではないが、誇張勝ちな芭蕉が何故短縮
という疑問はわく。事をしるさぬ以上、短くしておけということか。

2 暑湿の労に神(しん)をなやまし病おこりて事をしるさず。

たしかに7月1日の追い込み宿を嫌い、2日の馬を雇うとしたあたりは、芭蕉の体調が
思わしくなかったからかと思われるが、あとの旅程を考えると健脚といえる。
「事をしるさず」まず芭蕉が何かを記録していたかどうか、曾良に記録を任せてい
たのか。
曾良の記録が残っているというだけで、芭蕉が記録していなかったということには
ならない。
芭蕉日記なるものもあつたのかもしれない。出雲崎の「銀河の辞」などというの
も伝えられているのだから、ことさら「事をしるさず」はなかったと思える。

3 越中の国一ぶり

まず一ぶりはまだ越後。

<一振>

今日は親しらず、子しらず、犬戻り、駒返しなど云う北国一の難所を越えて
親しらず、子しらず、犬戻り、駒返しは一ぶりから越中のまでの難所。

ではこの一ぶりは、越中の滑川の間違いかというと、そう考えられればすっきりす
るのだが、そうは考えづらい。

日記>13日 市振立。...

中・後の境、川有。渡りて越中方、境村と云。加賀の番所有。...

人を雇いて荷を持せ、黒部川を越。申の下刻滑川に着。

日記にはっきりと市振のあと越中の境と記されている。
おくの細道を書くにあたっては日記が当然芭蕉に提供されているだろうし、
出来上がったおくの細道を曾良は写しているから、この間違いが気付かないわけもない。
越中の一ぶりという虚構空間が2人には必然だったと考えられる。
さて、芭蕉が描いた遊女のとの出会い。

まず芭蕉と曾良が僧形をしていた。
「腰間に寸鉄帯びず、襟に一囊をかけて手に十八の珠を携ふ。僧に似て塵有」
芭蕉自身の描写である。曾良もそれにならっている。
その塵とはなにかそれが俳諧。
遊女に心細いから坊様のあとをついていきたいと言われて、我々は寄るところが多いから、人の向かうところについていきなさいとこたえる。
それが慈悲と俳諧の違いだというわけだ。
ただ遊女の語り、それは当時流布していた江口遊女の歌を下敷きにしている。
ありえない越中の一ぶり、戯曲としか思えない遊女のとの出会い。

「おくの細道」という作品を全体を連句に見立てれば、たしかに恋の欲しいところだろう。
すでに恋呼びの句は出ている。芭蕉が直江津で発句に投げた句であり、越後路の本文に載せた句である。

文月や六日も常の夜には似ず
それを受けて
一家に遊女もねたり萩と月
となるか

曾良にかたれば、書とどめ侍る。と一ぶりの条の最後に。
日記にも書留にも何も触れられていない。
曾良どうおもっただろうね。虚に遊ぶってこういうことかと。

1999年5月25日の市振りは、雨と風のうら寂しい町だった。
市振の前後の洞門は風が吹きぬけ、大型トラックの水しぶきを頭から浴びた。
親知らずの洞門を抜けたところに道の駅。
そこにも雨風に向かっている芭蕉と曾良の像。

いまさらに親なし子なし風波洞門 心太

本文>><一振>

今日は親しらず、子しらず、犬戻り、駒返しなど云う北国一の難所を越えて
親しらず、子しらず、犬戻り、駒返しは一ぶりから越中のまでの難所。

親知らず・子知らずと市振りの関係ははっきりしない。
現代では親知らずトンネルの位置は、旧市振宿の西だが、
当時市振直前の1km程度の海岸をさしたらしい。

29 那古の浦

13日 市振立。虹立。…滑川に着。宿。暑気甚し
14日 快晴、暑甚シ…高岡に申の上刻、着いて宿。
翁、気色不勝。暑極て甚。小口同然。

どうやら越中路。暑に当てられたらしい。

小口 日記の中で判読できない字だったという。小生か。

陽暦では8月27日、28日。

現代でも富山、フェーン現象で記録的な暑さと報じられることが多い。

14日那古の浦に出て田籠に行こうとするのだが、宿もないと脅されて高岡へ。

那古の浦とは歌枕で知られる。

東風(あゆのかぜ)いたく吹くらし奈呉の海人の釣する小船漕ぎ隠る見ゆ 大伴家持

かって家持が越中の国司だったころこの浜辺を愛でたという。

白砂青松一里。西北に能登半島、東南に立山連峰を望む名勝だったという。

今は砂浜はなく堤防とテトラポット。

海中のテトラポットや歌枕 心太

田籠とは現在の氷見市内。ここも歌枕

藤波の影なる海の底清み雫石も珠とぞ我見ん 大伴家持

田籠の藤波は、春ならずとも初秋の哀とふべきものと、

芭蕉は行きたがったようだが

日記>氷見へ欲行、不往。

とあっさり。実はこのころ芭蕉よりも曾良の方が体調を崩していたようだ。

わせの香や分入右は有磯海

有磯は氷見への途中の名勝。現在みれば男岩、女岩という岩が海中にあるだけの単調な海岸。

風流の初めや奥の田植歌

と詠んだ旅も実りの秋へ。

その夜、私も高岡に泊り、ヘルメットの中で髪が目にかかるのがうっとしくて、坊主頭に。そして名物の氷見うどんを。

30 金沢

15日 高岡から埴生、倶利伽羅を越えて金沢へ。

末の中刻というから午後3時くらいだったか。

前日暑さですっかりまいった二人とは思えぬ快調な足取りである。

高岡、金沢間現在の北陸街道(8号線)で40km程度。

埴生、倶利伽羅峠越えてバイクのメータで49kmを指している。

倶利伽羅峠は御存知義仲が平氏を火牛の計で蹴散らしたところ、

だがこのスピードでは感慨にふけるひまもなかったのではないか。

こんなことを衣川でも書いた。あの時も芭蕉と曾良は駆け抜けるようなスピードだった。

倶利伽羅峠の峠近くに義仲の妻の墓。

義仲の妻というと薙の巴御前を思い出すがもう一人妻がいた。

葵御前という。彼女も義仲と同行。倶利伽羅峠での闘いのさなかに病で倒れた。

木曾殿に二人の妻あり薙咲く 心太

金沢に着くやいなや、休むまもなく

日記> 京や吉兵衛に宿かり、竹雀・一笑へ通ず、即刻、竹雀・牧童同道にて来て談。一笑、去十二月六日死去の由。

本文> 一笑と云ものは、此通にすける名ほのぼの聞こえて、世に知る人も侍りしに、去年の冬、早世したりとて、其兄追善を催すに、塚も動け我泣声は秋の風

と芭蕉慟哭

さて 越後、越中、加賀と芭蕉の本文の句の流れが見えてきた。

文月や六日も常の夜には似ず
一家に遊女もねたり萩と月
塚も動け我泣声は秋の風

俳諧(連句)的には恋呼びから恋、恋という運び。

一ぶりの遊女の場面は江口遊女の歌を下敷にとかいたが、それ以上に謡曲「江口」に。

俳諧ではオリジナリティより既存のものでもは其の流れの中でより効果があればよいとされる。この流れを作るために、一ぶりの遊女の話が謡曲「江口」から脚色されたと考えられる。

ただそれだけではない。おおよそそうだろうとわかることが初めからの芭蕉の目論見。塚も動けと慟哭する芭蕉の声に謡の大コーラスが重なることになる。芭蕉の構成力にはやはりおどろく。

七月一五日といえば、盂蘭盆。一笑の親族・知人にとってみれば新盆。

芭蕉がそんな日に金沢に入ったと言うのは偶然なんだろうか。

芭蕉、曾良とも一笑の死をしらなかったというが。

金沢に芭蕉と曾良は九泊十日。

こんなに長く滞在できるなら一、二日遅れてもいいと思える。

やはり七月一五日に金沢へ着かねばという思いが強かったのだろう。

こう考えるとますます一笑の死を知らなかったというのが謎めく。

芭蕉は知っていたのではないか。

一笑の追善会、加賀の門人たちとの交歓にいそがしい。

が曾良体調不調(予病気ゆえ)と席を外すこと度々。

31 小松

24日芭蕉と曾良は小松へ

25日多田神社に参拝。実盛の兜と、木曾願書を見る。

むざんやな甲の下のきりぎりす
と芭蕉。

なんとなく甲に押し潰されたきりぎりすを想像してしまうが

宝物の甲が飛んでいくわけではない。

横溝正史のミステリーの中では、この句が見立てになった殺人事件がでてくるが。

このむざんやなは、その前の

樋口の次郎が使わせし事供、による。

では樋口の次郎がなんのために来たかといえば首実見。

謡曲の実盛では

「唯一目見て、涙をはらはらと流いて、あな無残やな、齊藤別当にて候ひけるぞや」

キリギリスの声に、あな無残と謡曲の響が加わる。

さて前述した恋の流れは

文月や六日も常の夜には似ず
一家に遊女もねたり萩と月
塚も動け我泣声は秋の風
むざんやな甲の下のきりぎりす

この恋離れを得て一段落する。

さて越後、越中、加賀の運びは恋情の流れだけでなく、もう一つの流れがある。
旅情とでも云うべきか。こちらが地。

荒海や佐渡によこたう天河
わせの香や分け入る右は有磯海
あかあかと日は難面(つれなく)もあきの風
しおらしき名や小松吹萩すゝき

越後からの本文の簡素化は恋情と旅情の2本立てで進んでいるからだとも
いえる。

その下準備として

「暑湿の労に神を悩まし、病おこりて事をしるさず」と断り書きをしたのか。
この辺芭蕉ぬかりがない。

芭蕉の構成の巧妙さに驚いて、自分の旅について書くのを忘れていた。

5月26日

俱利伽羅峠を越えて金沢に入りすぐに兼六公園に、花菖蒲がそろそろ。
北枝宅と泉鏡花宅を見て卯辰山へ。卯辰山から天神橋へ下りる坂の途中の
民宿にとまる。夜半雨。

卯辰山手枕で聞く夜の雨 心太

27日雨やまず 朝犀川のほとりの(犀星のみち)の文学碑を見る。
あんずよ 花着け 地ぞ早に輝け

そしてここにも虚子・年尾父子の句碑
北国の時雨日和やそれが好き 虚子
秋深き犀川ほとり蝶飛べり 年尾

この虚子の句、敦賀の芭蕉の句を意識したか
名月や北国日和定めなき 芭蕉

犀川大橋を渡って

成学寺で

「あかあかと日は難面もあきの風」

願念寺で

「つかもうごけ我泣声ハ秋の風」

芭蕉句碑を見る。願念寺は一笑の墓地で

彼の辞世の句
「心から雪うつくしや西の雲」
の句碑もある。

小松に着いたのは昼過ぎ
建聖寺、日吉神社、多太神社とまわる

建聖寺 句碑
しほらしき名や小松ふく萩すすき
北枝が作った芭蕉木像がある。金網ごしの暗い小堂にあったのがそれか？

日吉神社
この神主(藤井伊豆)宅で俳諧興行。

多太神社 句碑
あなむざん甲の下のキリギリス

本文は むざんやな こちらのほうが金沢滞留中詠まれたもので、
謡曲実盛 樋口の次郎の
「唯一目見て、涙をはらはらと流いて、あな無残やな、齊藤別当にて候ひける
ぞや」のおどろきに近い。
この句を得たからこそ一振りの遊女を挿入しえたのだろうし、
一振りを挿入しえたからこそ、あなむざんはむざんやなと少しトーンをおとしえた
のだろう。

32 那谷

芭蕉ら 芭蕉、曾良、北枝。
小松をたったのは27日、その夜、山中に。
山中には27日から8月5日まで、8泊9日という長期滞在。
山中から曾良は全昌寺を出て大垣、伊勢へ先行。
芭蕉は北枝と小松にもどる途中、那谷寺参り。
山中での芭蕉の動向については、山中で考えるとして、
本文の構成がなぜ那谷寺を先にしたか。
考えられることはいくつか。
いずれもれ連句の進行として考えられるのだが

- 1 連句では「戻る」ということをきらう。
山中で湯浴みし小松に帰る途中那谷寺におもむきとは書きづらい。
- 2 連句では同じような場面が近すぎないようにする。
山中で曾良とわかるが、「別れ」の場面が金沢の一笑の死を知った場面と近い。
- 3 那谷寺でのしみじみした秋を、曾良とともに味わったことにしてほうが
山中の別れがドラマチックになる。

さてその那谷寺での芭蕉の句は
石山の石より白し秋の風

石山の石より白し秋の風
秋を白で表すのは御存知の通り、中国からだが。
ながくなるので簡単に。色と季節については以下のように組み合わせられる。
青春、朱夏、白秋、玄冬

上の句は、白いものは秋の風という付け(謎解き)の句と考えられる。

ただ石山が問題。

那谷寺は山寺であり、たしかに奇岩も多い。千手観音も岩屋に祀られている。

剥き出しの白い岩肌も眺めることはできる。

だからこの石山というのは境内から見える石山(岩山)と考えるのが自然だが近江の石山寺も想像させる。伊賀から京へ抜ける途中にあり、芭蕉がその近くに住んだこともある。

石山寺より剥き出しの白い奇岩に囲まれた寺ですね、この那谷寺は。

秋の風がひとしお身にしみます。

ということになるか、芭蕉と石山寺の関係をしらなくても、そういう読みもあると感じさせる句がおくの細道中に後で出てくる。

1999年の5月27日、雨上がりの午後。小松から少し行ったところで、おまわりさんに那谷寺までの道をきく。

「中央の黄色い線にそって行ってください。郵便局にでますから、それからすぐです」

50ccで道の真ん中走れというのかと、げげだったが、

なるほど、交わる道がどの道も同じような太さで、どちらの道がまっすぐで、

どちらの道がまがっているのかわからない。県道xx線の本道をということになる。

的確な道案内だった。

那谷寺は芭蕉がみたころと大きな違いはないのだろう。岩をけづった小堂などは「岩の上に作りかけて」そのままである。

境内に喫茶店。ここの名水でいれている。たしかに透き通った感じがある。

石よりは舌で知るべし那谷寺 心太

33 山中

山中で何故長逗留だったかといえ、

本文>温泉(いでゆ)に浴す。その功、有明に次と云。

有明は有馬の間違い。長旅の疲れをいやすための湯治であったろうが、

芭蕉のためというよりは曾良のためでというのが大きい。

曾良は金沢で体調の不調を訴え、俳諧の興行や金沢の士との歓談の席を度々欠席している。

山中へは金沢から北枝も同行。

芭蕉と北枝、無聊をなぐさめるためか、近辺の名所、光景を出歩くが、

曾良は尻が重い。

日記>29日 快晴、道明淵、予、不往。

晦日 快晴 道明ガ淵

29日は、芭蕉と北枝がでかけて、翌日、曾良を誘ったとみえる。

いいところだよ、話のたねに見ておくべきだ。そう遠くないよ。

また見てもいいな。とでも芭蕉の声か。

晦日行ったとも行かないとも書いてないが道明ガ淵。

しかたなく行ったが、曾良には感動がなさそう。

前にも書いたが、修辞をつくした芭蕉の名文よりも、曾良の簡潔さが好ましく思えるときがある。ここも。

さて彼らが泊まった宿が和泉(泉)屋。主人はまだ14才の少年だったという。

その少年、久米介の入門を許して、芭蕉、桃妖という名を与える。

芭蕉、いくつか号を有しているが、晩年まで使用した号は、

芭蕉(はせお)と桃青、桃青は李白を意識したもの。桃は青くすももは白い。
芭蕉は甥には桃隣と号を与えている。桃妖は桃は幼くみずみずしい。
まさしく桃妖は桃青の直弟子というところか、
それにくらべると桃隣は甥だからという感じが否めない。
この山中での逗留期間中に、芭蕉の薫陶を受けた北枝が山中問答を残している。
芭蕉の指導の実際が知られる書として貴重である。
私も10年ほど前読んでいたが、大半忘れていた。
この問答、芭蕉のこの旅の2つの成果。
一つは「おくの細道」、もう一つはこの「山中問答」。

のんびりと湯につかっていた3人だが、奇妙な別れが。
おくの細道最大の謎とでもいうべき別れ。
本文>曾良は腹を病て、伊勢の国長島と云所にゆかりがあれば、先立てに行に、
行いきてたふれ伏とも萩の原 曾良
と書置たり。いくものの悲しみ、残るもののうらみ、
隻ふのわかれて雲にまよふがごとし。
予も又、
今日よりや書付消さん笠の露」

腹の病はたしかだろうが、その病を癒すために山中へきたとのだろうから。
8泊9日の湯治、完治しなかったにせよ、ある程度体調は復したであろう。
本文では大仰に別れを惜んでいるが
日記では
日記>5日 朝曇。昼時分、翁・北枝、那谷へ趣。於小松、
生駒万子為出会也、口談じて帰て、即刻、立。
大正待(大聖寺)に趣。全昌寺へ申刻着、宿。
夜中、雨降る。

ここには治療を急ぐために長島に急ぐとは書かれていない。
むしろ芭蕉と北枝が小松へ戻ると言い出したようだ。
生駒万子とは誰か 千石取りの加賀藩士だという。
千石取りといえば相当な格の武士。北枝との繋がりか。
これだけでは曾良が単独で先行する理由は見えてこない。
その後も日記は続いている。体調が不調とは思えないような
快調な足取りである。
しかも数日後に同じ道を辿るであろう、芭蕉のために宿の手配もし
敦賀ではどこで金策したのか、一両の金を芭蕉に渡してくれと
出雲や弥市郎に預けている。
やはり奇妙だ。これからの道中でももう少しわかるかもしれない。

さて私も奇妙なことに出っくわした。
山中温泉に着いたのは、16:21
ゆっくり温泉につかって、芭蕉の句碑でも散策しようと。
バスターミナル近くのホテル案内所へ。
「安いといっても山中だからねと、1万だね」と案内の女性。
1泊2食付き1万円のホテルを取ってもらって、クーポン券を購入。
指定のホテルに。部屋は中庭に面した湿っぽい部屋。
茶と菓子を女性が持ってきて、すぐに戻っていった。
菓子は最中。疲れていたから甘いもの欲しいとがぶっと。
口に違和感。吐き出す。なんと最中の中、カビがびっしり。
口を漱ごうとポットからお茶をついだらゴキブリが。缶コーヒーを持っていた。
とっさにそれで口を漱いだ。

フロントに電話。最中と湯のみ茶碗を見せる。
もうとまる気にならない。クーポン券を返してもらって
案内所で返金してもらった。他をあたる気もなくなっていた。
せめて湯だけでもと菊の湯という共同浴場に。
山中温泉の総湯。昔は宿に内湯はなかったというから、
芭蕉も曾良も北枝もここにきたのだろう。
深い浴槽だった。

書留>

山中や菊は手折らじ湯の馨 翁
秋の哀入かわる湯や世の気色 ソラ

曾良の句、北枝とかわる無念さを感じさせる。

全昌寺・汐越の松

芭蕉と北枝、目当ての生駒万子に会えたかどうか不明。
加賀に蕉門の根をおろすための後ろ立てを求めたものか。
小松の地で新たな交流が書かれていないから、生駒万子に会えたとしても
顔見世程度であったか。
さてこれからの芭蕉の足取りだが、豆に記録をのこしてくれていた、曾良がいない。
それに芭蕉は日付をほとんど書かない。たまに日付が書いてあるところがあると、
研究者が、なぜ日付が書かれているのかと目の色を変える。
それにしては金沢の7月15日に注目している著作に会っていない。

曾良も前の夜、この寺に泊て、
終宵(よもすがら)秋風聞やうらの山
と残す。

この句西行の汐越の松をふんでいる。曾良の句かどうか疑わしい。
曾良は8月5日と6日泊まっているから7日に芭蕉らは全昌寺
ついたということになる。
さて山中の別れについてはおいおい考えていこうと書いた。
まずはっきりしていることは、生駒万子に会うために、芭蕉が曾良と別行動を取っ
たということだ。
生駒万子は千石取りの加賀藩士。生駒重信万兵衛。
芭蕉に彼を引き合わせようとしたの北枝だろうと思われる。
北枝の生業は刀研。それで加賀藩の要人との伝もあったのだろう。
加賀に蕉門の根をおろすための後ろ立てを求めたものだとして、それに曾良が同行
することになにか不具合があっただろうか。
すぐに考えられるのは、村上藩での不調である。曾良に引っ張りまわされたあげ
く、鳥目百疋でほんとうの坊主の真似をさせられたという、苦々しさが芭蕉にあった。
これは私の推測である。
越後路の宿のトラブルも芭蕉の不機嫌さの反映であったかもしれない。
あとは北枝が曾良は生駒万子と合わないとおもったのかもしれない。
それ以上に北枝と曾良が合わなかったかもしれない。
曾良は主思のだが、他の門弟との付き合いがすくないし、特に町人の門弟には武士
としての高飛車な面が出ていた。また思いついたら書いていこう。

翌日全昌寺を立とうとする芭蕉に若い僧が句を求める。

庭掃て出ばや寺に散柳

即興の面白い句だ。禅寺に泊まった人間は掃除でもしていくのが慣わし。
掃き終えてでようとしているのに、また柳が散ってきたよというところか。

本文>吉崎の入江を船で棹して汐越の松を尋ぬ。
終宵(よもすがら)嵐に波を運ばせて
月をたれたる汐越の松 西行
此一首にて数景尽たり。もし一弁を加るものは、無用の指を立るがごとし。

芭蕉随分な思い入れだが、この歌、西行作と伝えられているが西行の歌ではないらしい。では誰の歌か、吉崎の入江には吉崎御坊という、北陸に大教団を作った蓮如の旧跡があり、東西本願寺の別院が置かれている。この歌、その蓮如の作ではないかと言われている。それも定かではない。

山中でひどい目にあった私はというと、8号線を西へ。。
湯上りに風が心地よい。携帯電話が。会社からだ。
この旅行中に、私の部下になるべき男が入社していた。
ところが「どうも申し訳ありません。まるで使いものになりそうもないのでやめさせました」
「しかたないな」。夕日があかあかと水田に沈む。これが難面(つれなく)もということか。

湯のなごり浮世の気色かいま見え 心太

福井県丸山町に入って24時間サウナを見つける。ここでいいやと入る。
入浴料500円、深夜料金500円也。初めて鯛の糠漬けなどというものを食べる。

あかあかと糠鯛の身の頼もしさ 心太

翌28日、大聖寺(地名)の全昌寺へ。本堂にあがって五百羅漢を見ていたら電話。
小田原の新九郎から、「小田原文芸展をやるから出品してよ。初めての試みよ」
「今、仏さんをみていた。仏の声と思って参加させていただきます」と答える。
芸展の一部が <http://sasa.org/bungeiten/index.html>
この寺に杉風作の芭蕉像があったというのだが、見たやら見ないやら。

羅漢寺手折れぬほどの小さき花 心太

昼過ぎ芦原ゴルフクラブに、ゴルフをやろうというのではない。
このゴルフ場の敷地内に汐越の松の跡がある。
クラブハウスで記名して係りの男性に案内してもらおう。5分ほど松林の中を歩いて
「ここあたりが汐越の松だそうです」
金網の向こうに海。覗き込むと崖で、崖の途中に痩せた松が何本か。
「こんなところに芭蕉さんきてくれたんでしょうか」
「あー 芭蕉は海から見たそうですよ」
「アーそうですか、それでも年間100人くらいここを見にくるんですよ」

34 天竜寺・永平寺

船から汐越の松を眺めるのは爽快だったろう。
本文>丸岡天竜寺の長老、古き因みがあれば尋ぬ。
この丸岡というのは隣町の松岡の間違い。北潟から天竜寺までおよそ6里。
古き因みとはなにかは、不明。当時の住職はかつて江戸品川の天竜寺の住職だったとか。ここまで金沢から北枝が同行していたが、彼ともここで別れることになる。
金沢滞在中のいつごろから北枝がいっしょであったかわからないが

山中滞在前後の5日ほどは芭蕉に同行したのはたしかだから
都合14日ほどか。

その道中での北枝を芭蕉は

本文>所々の風景過さず思いつづけて、折節あはれなる作意など聞ゆ。
と俳諧途上人とうれしそうに眺めている。山中問答もなかなかの熱の入れよう。
おくの細道で温めていた不易流行の理論を、この新参の弟子に語っている。
長旅を重ねていた曾良には語った気配がない。こんなところも曾良との別れの
一因かもしれない。

本文>既別に望みて

物書て扇引きさく余波(なごり)哉

扇に餞別の句を互いに書いて扇を引き裂いて分け合ったというわけだ。

芭蕉別れを演出するのに長けている。

では北枝はどう応えたか。

松岡にて翁に別侍りし時、あふぎに書いて給わる

もの書て扇子へぎ分る別哉 翁

笑ふて霧にきほひ出ばや 北枝

となくなく申侍る

きほい 気負いか?

北枝と別れて芭蕉は永平寺に。この日は一人旅であったか。

本文>五十丁山に入て永平寺を礼す。道元禅師の御寺也。邦機千里を避て、
かかる山陰に跡をのこし給ふも貴きゆへ有とかや

永平寺は曹洞宗の本山、道元開基。

邦機は邦畿の間違い邦機千里とは都と都周辺の繁華街という意味。

貴き故かどうかはわからないが

禅道場としてのふさわしき場所を求めた、当時は比叡山の圧力もあったらしい。

道元の有力な庇護者もいた。

芭蕉と禅の関係はというと、深川に逗留していた仏頂和尚に禅の手ほどきを受けた
という。

黒羽で雲巖寺おとずれたのも和尚ゆかりの寺だったからだが。

あまり信憑性のない話だが

「古池や蛙飛び込む水の音」という句も何度かの参禅の折の

公案に対する解だったとか。

芦原ゴルフクラブから、私は寄り道。三国半島を廻って東尋坊へ。

東尋坊の標識を見て右におれると土産物屋街。どこに海があるやら。

土産物屋の間の路地をぬけると青い海と奇岩が。

見下ろせば何十メートル下に波がぐだけている。

青木ガ原と並ぶ自殺の名所だとか。

ひときわ高い岩の上に公衆ボックス。

電話番号が2つほど。ちょっと待て、死ぬ前に。

死のうと思って来た人の話相手になっているらしい。

断崖の公衆ボックス呼び出し音が 心太

丸岡に戻って松岡の天竜寺についたのが16:25

芭蕉翁の句

物書きて扇引きさく余波哉

句碑を眺める。

永平寺の山門に着いたのが17:00
東尋坊の寄り道が祟った。このお寺17:00になると閉門してしまっ
て入れない。
門前に山頭火の句碑が彼も曹洞宗の僧侶であった。
てふてふひらひらいらかをこえた
水音のたえずして御仏とあり
生死の中の雪降りしきる

堀沿いを少しあるいてみたが堀のこわれもない。
てふてふひらひらこえられぬ 心太

35 福井

一人旅の芭蕉だがそう心配することもあるまい。
もう何度も一人の長旅を重ねている。
それに福井には少しあてがあった。等裁という隠士。
芭蕉は隠士好きである。
須賀川でも可神という栗の木の下に住む隠者が登場した。
夕顔、へちまのはえかかりて、鶏頭、はは木々に戸ぼそかくす あやしの小家
なにやら根岸の子規庵を思い浮かばせる。
ごてごてと草花植えし小庭哉 子規

等裁は連歌師であり、福井俳壇の長老格。十年前江戸の芭蕉を等裁が訪ねた。
「私が福井へ行くことができましたらきっとお尋ねします」
そう芭蕉もいったのだろう。
いかに老いさらばひて有にや、将死にけるにやとこれは修辞。
一笑も死んだ。曾良とも別れた。北枝とも数日前に別れた。
もう死んだ人を出すわけにはいかない。等裁の家に2泊する。

福井では等裁とならんで彼の妻がでてくる。その妻、このような妻なら隠士の
邪魔にはなるまいと思える。
此うちこそと門を叩けば、侘しげなる女の出で、
「いづくよりわたり給ふ道心の御坊にや。あるじは此あたり何がしと云うものゝ方
へ行きぬ。もし用あらば尋ね給へ」という。かれが妻なるべしと知られる。
むかし物かたりにこそ、かかる風情は侍れと、

等裁の家には客用の枕がなくて、どこぞやから程好い幹をもってきて、
芭蕉の枕にしたとか、その木枕が後世に伝わって、奇特の人がその木枕から
芭蕉の坐像を京の仏師につくらせたと云うが、どこにいったかつたわっていない。

木枕の芭蕉様もねまる也 心太

どうやら芭蕉と等裁意気投合したらしく
本文>名月はつるがみなどにとたび立。裾おかしうからげて、路の枝折と浮かれ立つ

等裁は気難しい隠士ではなかったようだ。
この浮かれ立つで別離の場面が続いた「おくの細道」が明るく、軽くなった。
曾良との別れのあと、二人の人物がえがかれている。
これらの人物と曾良を比べてみるとあの奇妙な別れの一因が見えてきそうだ。
北枝 俳諧の求道者
等裁 俳諧の道楽者。

芭蕉 俳諧の求道者であり道楽者

蕉風の俳諧というものが求道であり道楽であるのだから、芭蕉のそれは当然だが曾良はというと求道、道楽そのどちらでもなさそう。

芭蕉からみた曾良は「予が薪水の労をたすく ぎ旅の難をいたわらん」という実務能力に長けた執事。曾良は主思いの忠義一徹。

何かで信頼関係がくずれば、いっしょに旅をしていて曾良ほど退屈でつまらない人間もいまい。

また曾良がそれを感じ取ってしまうと、表情にだせぬ男ゆえ内にこもる。

引き金は村上だったろう。まず芭蕉が体調不調。そして曾良が。

そして金沢、一笑の死、芭蕉は知っていたのではないか、それを芭蕉は曾良に告げなかった。

7月15日に金沢にはいるために、芭蕉が曾良をいそがせたのではないか。

芭蕉の脳裏にはこれから書くであろう「おくの細道」の北陸のクライマックスに一笑の死をおこうという意図があったかもしれない。

胃の病とは神経性胃炎らしい。これは敦賀でも触れる。

ただ金沢に着いて曾良が一笑の死を知ったとき、芭蕉との気持ちの乖離を感じただろう

自分の役割が終わったと、それを決定的にしたのが山中。

加賀藩の要人との面談に彼が外されたことによるのだろう。

曾良に、北枝の求道、等裁の道楽があれば山中の別れはなかったかもしれない。

永平寺から戻って、また丸山のサウナへ この日の走行130km

サウナの仮眠室、大いびきの合唱で眠れず。

翌朝永平寺を何もみないのは気もひけるが、曾良は行っていないし

芭蕉の記述も実景を感じさせない。で福井へ直行。

福井駅から5km離れたところに佐内公園という小公園がある。勤皇の志士。橋本佐内の銅像が公園中央に。

この公園の隅に等裁の旧宅あとが。ここにあやしの小家があったのか、ここから裾をおかしくからげて、等裁が浮かれでていったのだ。

そこにも芭蕉の句碑

名月の見所問ん旅寝せん 芭蕉

「月をみるんでしたら敦賀港ですよ、もう一泊ここに泊まれて、14日敦賀がよろしいでしょう

私のご案内いたしますよ」

そんな等裁の応えが聞こえてきそう。

等裁も俳句で軽妙に応じたかもしれない。

名月は敦賀みなとよ浮かれ立ち 等裁に真似て

なんと本文そのものになる。

36 敦賀

芭蕉の一人旅はわずか一日で終わった。こんどは等裁との2人旅。

福井から敦賀の路は等裁の良く知るところだろう。路の枝折(みちしるべ)と浮かれ立ったのだから

途中福井近郊の歌枕を訪れる。

あさむずの橋をわたりて、玉江の葦は穂に出にけり

これも福井からは玉江が先であさむずの橋があとだが、橋を渡ってから葦の江方が道行としてふさわしいと思ったのか。いかなる歌枕か

あさむずの橋は枕草子の言挙 「橋はあさむず」による。

現在朝六つ橋には句歌碑が

越に来て富士とやいはん角原(つるが)の文殊がだけの雪のあけぼの 西行法師

朝六つや月見の旅の明けはなれ 芭蕉

現在では敦賀-原発-文殊という連想になるか

夏かりの玉江の芦を踏みしだきむれ居る鳥のたつ空ぞなき 重之

さて8月14日の夕、敦賀に着いた芭蕉と等裁を迎えたのは、
本文>その夜、月殊(ことに)晴たり。「あすの夜もかくあるべきにや」といえば、
「越路の習ひ、猶明夜の陰晴はかりがたし」と、

敦賀の天気は変わりやすい、今日は今日、明日は明日と
この宿の主の語りは孫明復の詩
八月十四日夜
銀漢無声露暗垂
玉蟾初上欲円時
清樽素瑟宣先賞
明夜陰晴未可知

本文>あるじに酒をすゝめられて、けいの明神に夜参す。
月清し遊行のもてる砂の上

時宗(じしゅう)の僧が毎年砂石を運び境内を清めたことによる。

本文>十五日、亭主の詞にたがわず雨降る。
名月や北国日和定めなき

孫明復の詩を踏まえた場面が作りたくて、芭蕉は14日に敦賀に入ったとも言える
かもしれない。

芭蕉に先行した曾良の敦賀の動向は 八月九日(陽暦9月22日)
未の刻、つるがに着。先、氣比に参拝して宿かる。唐人が橋、大和や九兵へ。
食過て金が崎へ至る。山上まで24,5丁。夕に帰。
かうのへの船かりて、色浜へ趣。海上4里。戌刻、出船。
夜半に色へ着。くがはなん所。塩焼男導て本隆寺へ行て宿。

すごい行動力だ。午後3時についてまず氣比神宮に参拝。それから大和やへ
そこで食事を取って、1丁100mとすると25丁で2,5km。参拝して
彼の足だと1時間だろうか
うっかり食い過ぎてと読んで腹ごなしに登ったのかと。
夕食を取ってという意味だと苦笑。
それから船の手配をして、午後8時 船にのる。真夜中色が浜に。
元気だ。腹をやんで治療に急ぐ人の行動とは思えない。
それに真夜中行ってとめてもらうためには、前もって連絡してなければ叶うまい。
くがはなん所とは、陸は難所の意味だというが。
色が浜からの行動もすばやい。それについては色が浜で。

5月29日 私は左内公園から玉江、朝六つの歌枕を辿って8号線を南へ。
途中河野の道の駅に。対岸に敦賀半島が。半島の中ほどに色が浜があるはずだ。
まで曾良は「かうのへの船かりて」だった。
まるで逆へ行こうとしている船に色が浜へ行ってくれと頼んだことになる。
たしかに色が浜から敦賀湾を横切って河野へ行くことは可能だが。船頭は大仕事
だ。
8号線をさらに1時間ほど南へ、いきなり氣比神宮へ出た。午後3時ちかく。

社殿前の広場の玉砂利が目にはたいほどまぶしかった。

広場の隅に芭蕉句碑と芭蕉像

芭蕉句碑には

気比のみや

なみだしくや遊行のもてる砂の露 はせお

芭蕉像の台座には

月清し遊行のもてる砂の上 はせお

本文と同じである。推敲の結果こうなったのだろうか多くの書では。

敦賀に行ったときはそんなものかと思っていたが。

これを書いている現在、頭をかきむしりたくなる。

福井から等裁を誘ってまでの月見、宿の主人に15日はれるかどうか
敦賀の天気は変わりやすい。今日晴れてるからと月見をかねての夜参で
詠んだ句に「月がない」こんなこと考えられるだろうか。しかも等裁の
月の句も伝わっていない。単純に考えれば十四日月がでてなかった。
月がでてなかった以上気比の夜参もなかったのだ。

なみだしくや遊行のもてる砂の露

8月14日陽暦9月27日、たしかに露もありえようが、砂(玉砂利)が露を
帯びるだろうか、しかも朝方ではない宵の口だ。

これは翌日の敦賀めぐり、(気比神宮から金が崎、敦賀湾の海岸)

雨だったらいい。そのときの句でなかったか

砂の露とは雨にぬれそぼる風情でないのか

同じく15日に詠まれたと思われる句に

つきのみか雨に相撲もなかりけり

十四日の宿の主の言から孫明復の詩の引用。月見の話は敦賀にきて
月が見れなかった芭蕉の無念さが作り出したフィクションだと思える。
元禄二年8月14日の敦賀の天気がわかればはっきりするのだが。

金が崎へは色が浜の帰りによったのでそのとき書こう。

元禄二年8月14日の天気について

笹の知りうる資料は唯一つ。日記。

曾良はどこにいたか、大垣。

十四日 夜に入、月見してあるく。竹戸出逢。清明。

8月15日未の刻 雨降り出す。

敦賀と大垣の天候の違いがどの程度かはわからないが、

本文の天候の記述と曾良の記述は合っている。

特に十四日を清明と曾良にめづらしい表現。

それでも敦賀の十四日は腑におちないが。

37 種の浜

種(いろ)の浜、色の浜とも書く。現代ではこちらの表記。

敦賀半島の中ほど敦賀湾に面した小さな漁村である。

本文>十六日、空霽(はれ)たれば、ますほの小貝ひろはんと、

種(いろ)の浜に船を出す。

ますほとはますう真蘇枋の間違いで紅色の花をつける。またその花から染料をとる。紅色の小貝で実のなき貝をますうの小貝というという。

汐そむるまでますうの小貝ひろふとて色の浜とはいふにやあらん 西行

この歌に惹かれて芭蕉は色が浜へ。歌枕で知られてはいるが、ただこの歌とて西行がこの地を訪れたということにはならない。色が浜という地名の由来をこんなことであるのであろうと詠んでるだけにすぎない。有磯の海も見れなかった芭蕉たつての望みだったのだろう。

本文> 破籠・小竹筒などこまやかにしたためさせ、僕あまた船にとりのせ

先行した曾良が入念な準備をした甲斐があったのだろう
なんと弁当、酒しもべまでそろえての大名旅行。
で浮かれにいったのか、いやさびしかりに

本文> 浜はわづかなる海士の小家にて、侘しき法花寺あり。
ここに茶を飲、酒をあたゝめて、夕暮れのさびしさ、感に堪えたり。

寂しさや須磨にかちたる浜の秋
波の間や小貝にまじる萩の塵

須磨というのは寂しさゆえに須磨であり歌枕になった。源氏物語以前からの機内からみた須磨の印象であった。古代関屋があり機内勢力の外れと思われていたのかもしれない。芭蕉も須磨は訪れている。須磨で読まれたという芭蕉の句をあげると

蝸牛角ふりわけよ須磨明石
須磨寺や吹かぬ笛聞く木下闇
友まつと見えず紅葉に一人かな
見渡せばながむれば見れば須磨の秋

松島のおよそ洞庭、西湖に恥じずというような、芭蕉の実見の伴わない表現ではない。体験にもとづく比較であった。それと須磨に勝ちたるという直接的な比較。

石山の石より白し秋の風
これも同工かと。

本文> その日のあらまし等裁に筆をとらせて寺に残す。

では本隆寺に残されている等裁の書とは
ハンドブック>

気比の海の景色にめで色の浜の色に移りてますほの小貝とよみ侍しは西上人の形見成けらし されば所の小はらはまでその名を伝えて汐のまをあさり風雅の人の心をなぐさむ

下官(やつがれ)年此思ひ渡りしに此たび武江芭蕉桃青巡国の序このはまにまうで侍る

同じ船に誘われて小貝を拾ひ袂につゝみ盃にうち入れなどして彼上人のむかしをもてはやす事になむ

越前ふくろ 等裁書

小萩ちれますほの小貝小盃 桃青

元禄二仲秋

等裁まじめくさっているが、なんとなくおかしみの伝わる文書だ。

色が浜でもすばやいと書いた曾良の行動である。

日記>十日 快晴。朝、浜出、詠む。

お一曾良でも句を詠むんだ。なんと失礼なことを。

なぜか曾良自発的に句を詠んだ気配がおくの細道ではない。

芭蕉の思いの邪魔をしないという配慮もあったかもしれない。

で何を詠んだ。解らない。少なくとも色が浜で曾良が詠んだ句はしられていない。

それから船上宮(常宮)へ、陸路の難所をこえて敦賀に。途中西福寺に。

敦賀に戻ってから出雲や弥市郎に一両の金を芭蕉に渡してくれと預け翌日

天や五郎右衛門に芭蕉への手紙を託す。五郎衛門は留守だったというから家人に

託したのだろう。この天や五郎右衛門(この使用人)が船を仕立て芭蕉を色が浜

まで案内した。

曾良は一両の金どこから工面したのであろう。これについては推測するてがかりが

何もない状態である

一つ考えられるのは常宮に彼の神道上の伝でもあったか。

1999年5月29日 16:11

色が浜の本隆寺へ気比神宮からおよそ20km

かつての陸難所(くがはなん所)も少々カーブがあるだけで快適な道に。

というのもこの敦賀半島の先端に原子力発電所ができたからだ。

幹線道路から外れて細い道を海岸へおりと、そこはわずかなる海士の小家の色が

浜

現在は鉄筋の堂々たる民宿が数軒と狭い浜に10数戸の民家。

まず本隆寺へ。

小萩ちれますほの小貝小盃 桃青

衣着て小貝拾わんいろの月 芭蕉

の句碑が。ながめていると庫裏からご婦人が出てきて小さなビニール袋を私に。

袋の中には紅色の小貝と今みた芭蕉の句の葉が。

これがますほの小貝か ありがたくいただく。

本隆寺の向いの民宿にとまる。縁側から砂浜がつづいて入り江。

本隆寺から少しいったところにお堂がそこにも芭蕉の句碑

寂しさや須磨にかちたる浜の秋 芭蕉

1999年5月30日

この日は書くべきことが多い。

おくの細道の本文では種の浜のあとは終着大垣である。

色が浜から大垣まで100キロ強。寝つきがわるかったのに目が覚めたのは早かつ

た。

外に出る。まだ肌寒い。浜で焚き火をしている。その炎の色がまだあけやらぬ海に

写る。

色浜やかかり火で待つ日の出かな 心太

日があがる海水の透明度は高い。ますほの小貝は見えない。透明なくらがゆれている。

来た道に戻る。途中気比の松原に寄る。ジョギングの人、草野球の人。日曜日だっ

た。

8:20 金が崎下の金前寺に。

月いづこ鐘は沈るうみのそこ はせお

それから坂道、階段をあがって金が崎宮へ。
手も合わせず奥の金が崎城址へ。ここは南北朝の時代、後醍醐天皇の皇子
尊良親王、恒良親王がたてこもり足利勢に抗した。
戦国の世、朝倉攻めの信長が浅井の裏切りにより窮地におちいり越前から脱出。
最後まで秀吉がここに残り殿をつとめたという。
暗い木立を歩いていると、ここから抜け出せなくなりそうな気分にあわてて戻る。

38 大垣

色が浜からはまた船で帰ったのであろう。8月17日か。敦賀には路通が迎えにま
っていた。
路通は当初、この「おくの細道」の旅の同伴者と目されていた。かれは居の定めのない男。一時乞食として放浪していたという。
だいたい湖南、大津から彦根あたりにいることが多かった。
曾良とどこで連絡を取ったのだろう。曾良は8月12日長浜から船で彦根にいつて
いる。
長浜からだったら直接大垣に向かった方が早そうだ。
ここで路通と連絡をとったものか、彼の日記には路通の名前はでてこない。
隠士等裁に代わって乞食路通が芭蕉の供となった。8月18日敦賀を発ったか。
敦賀から大垣への道、二人は馬で。途中木の本、関が原あたりで泊まったらしい。

大垣についたのは8月20日ごろになる。
本文>大垣の庄に入ば曾良も伊勢より来り合い、越人も馬をとばせて、如行が家に入集
ると曾良との再会の場面を書いているが、その曾良は。

曾良の敦賀からの足取りは
11日 敦賀を立ち、木の本(木の下)へ
12日 木の本を立ち長浜へそこから琵琶湖を船で彦根へ
13日 彦根から関が原へ
14日 関が原から大垣へ
15日 大垣から伊勢長島へ
16日 藩医森如庵に病状を訴える
森氏、折節入来。病躰談。…其夜より薬用
17-29、9月1日まで天候のみ。
2日 大垣に行く為長禅寺へ(長島町内)
3日 夕大垣に着。木因に会う。(越人に会う)
4日 源兵へ、会いに行く
5日 天気のみ
6日 辰刻出船、木因、馳走。越人、船場に送る。如行、今一人、三里送る。

芭蕉が大垣についたころ、曾良は病氣療養に専念していたということになる。
藩医の診断を受けたのは彼は元長島藩士であったからだろう。
その間芭蕉や木因から手紙等あっただろうが、それにはふれられていない。
それより奇妙なのは3日大垣についてからの記述に翁のことが一言もでてこない。
いや金一兩を天のやに預けていらい、伊勢に旅立つときすら翁の一字もでてこない。
やはりなにかわだかまりがあるか。

本文>大垣の庄に入ば曾良も伊勢より来り合い、越人も馬をとばせて、如行が家に入集
前川子、荊口父子、其外したしき人々日夜とぶらいて、蘇生のものにあふがごとく
、且つ悦び、且ついたはる。

ここも奇妙なことにまず真っ先に名前があがるべき木因の名前がない。

大垣俳壇の中心で、彼を通じて蕉門に入った弟子達も多い。
今回も芭蕉歓迎の中心になっていた。
おくの細道をまとめるころ、芭蕉と大垣俳壇は疎遠となっていたという。
それも芭蕉が「おくの細道」中に温めた新風・不易流行を巡ってだということから
皮肉なものである。

さて芭蕉が深川を出るとき、どこまでを今回の旅としようとしたか、
何故大垣がおくの細道むすびの地なのか
元禄2年の3月23日、安川落梧に宛てた手紙によれば、
「みちのく・三越路(みこしじ)の風流佳人のあれかしとのみに候」と書いている
三越路とは越後、越中、加賀、越前をいうのだろう。
それと「伊勢の遷宮を拝まん」と親しい門弟にいていたということから
三越路からの旅の終わり、伊勢への旅の始まり、そして気心の知れたところと
選べば大垣しかない。
ともあれ3月27日深川を出た芭蕉は9月6日、伊勢へ旅立でこのおくの細道を閉じたのだ。

蛤のふたみにわかれ行秋ぞ 芭蕉

1999年5月30日

敦賀をでて、賤ヶ岳、ロープウエーであがって琵琶湖を見下ろしてから余呉へ。
余呉から木の本へ出て関が原へ。
関が原の古戦場の東軍の陣屋跡をながめる。
芭蕉が衣川で詠んだ
夏草や兵どもが夢の跡
の句をここ、関が原に重ねる人の多いことも頷ける。
此処から大垣は一本道。

16:27 大垣、おくの細道むすびの地記念館に
閉館が迫っているのでもあれ入る。おくの細道の旅程の地図が、
各地で詠んだとされる句が掲示されている。私が見てきたところだ。
「聞いてください。おくの細道の全行程を22日かけて
50ccで走ってきたんです。今着いたんです。
2500kmぐらい走ってきたんです。」
誰彼なく叫んでみたい気持ちになった。だが誰もいない。

深川の採茶庵(杉風の別荘)を出たのが5月9日10:30
むすびの地記念館についたのが5月30日16:27分 走行距離2483,6k
m

むすびの地記念館の前を流れる用水(水門川)。其の両側に芭蕉と大垣の俳人たち
の句碑がずらりと並んでいる。
記念館の近くから辿っていけば
ふらずとも竹植うる日はみのと笠 はせお

それから用水沿いに下って
木因何某隠家をとふ
隠家や菊と月とに田三反 はせお

い勢にまかりけるをひとの送りければ
蛤のふたみに別行秋ぞ はせお
そして芭蕉と木因像

対岸に渡って住吉灯台の北側に杉風に当てた手紙からの引用。
木因船にて送り如行其外連衆舟に乗りて三里ばかりしたひ候
秋の暮行先々は苦屋哉 木因
菘にねようか菘にねようか はせお
霧晴ぬ暫く岸に立玉へ 如行
蛤のふたみへ別行秋ぞ 愚句
先如此に候 以上 はせお

9月22日

それを上って

霧晴ぬ暫く岸に立玉へ 如行

さらに

花にうき世我酒白くめし黒し 芭蕉子

なぜこの句がここにあるのかわからないが

あとがき

30日の夜は大垣の駅の近くの旅館に。
芭蕉は大垣から揖斐川を下り長島へ、そして陸路、伊勢へ向かった。
私は大津に出て信楽、伊賀上野を経て伊勢へ。
大垣からの旅はまた別の機会にご報告しよう。

1999年5月9日小田原を出て、深川の採茶庵からスタートをした
この芭蕉の旅のトレースは5月30日、おくの細道むすび記念館でゴールとした。
この間22日50ccのバイク(バイク)で走行距離2483,6km。
50歳のささやかな冒険であった。

その記録をこの掲示板 [sasa.org bbs1](http://sasa.org/bbs1) で書き始めたのが、
小田原に帰った翌日の6月6日
ひとまず書き終えたとしたのが、2002年7月11日。
3年と1月余かかってしまった。
その間、数ヶ月も書けなかつたときもあり、自分自身書き終わられるか覚束なかつた。なにはともあれ書き上げられて幸い。
3年もだらだら書いていたので、初めのころと終わりのころではまるで調子が違う。
「おくの細道」の読み方も違ってしまっている。旅の記憶も薄れてしまっている。
なんとかつづけてこられたのも、この「おくの細道」をお読みいただいている、皆様のおかげお礼申しあげます。